

---

# 鬼姫怪奇譚

詩鳴研一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鬼姫怪奇譚

### 【Zコード】

Z3370Z

### 【作者名】

詩鳴研一

### 【あらすじ】

入学当時以来藤原玲璃という女性を避けてきた相馬楓は、友人の頼みで藤原玲璃が部長をやつている学校唯一の非公認部活『怪奇研究部』を訪れることが決定してしまった。藤原玲璃に、友人の恋人が化け物になつたと相談するため、部室棟の中を歩く楓の足は、異常なまでに重かった。まるで、ここから先には進むなど、暗示しているように。

## 突然変異 へ1 藤原玲璃

藤原玲璃と初めて対面したのは一年前、四月七日の朝だった。

学生的感覚で年始めのその時期、世間の学校や若者は入学シーズンを迎えていた。同じ年、秋雨という名の高等学校に進学した僕にとってもそれは例外ではなく、藤原玲璃と初めて出会った当日入学式だった僕は、期待に胸を膨らませながら通学路を歩いていたのである。

今にして思えば、その時点でおかしかつたのかもしない。通学はバスを使おうと思っていたのに、その日に限って早起きして気分が良いから歩こうなんて思った時すでに、あるいは、結果徒歩で登校している最中、何の疑いもなく通り慣れていない近道を選択したときにはもう、僕の普通として進んでいた筈の日常は外れ始めていたのかもしれない。

慣れない道を進んだ末、登校時刻よりずいぶん早く学校についた僕は、何の気兼ねも無く学校敷地内に入り、昇降口を上った。時計を見て、朝七時だからまだ玄関口は開いていないかもしれないな等と考えながら、段差を上り終えると同時に、視界の先に一人の女子生徒が見えた。

其の人物が当時は名前も知らなかつた藤原玲璃だったのだ。ちょうど漢字のハの字型になっている階段を反対側から上ってきた彼女は、制服であるブレザーとスカートに身を包み、左手にカバンを持ち、黒い眼で正面をまっすぐ見据え、漆黒の長髪を靡かせながら現れたのである。

最初の感想としては、綺麗だが暗い女性、だつた。目は眠たそうに下がり気味だつたし、若干猫背だつたこともあるのだが、それだけが原因ではない。今でも思うことだが、彼女からは不思議なオーラが発せられている気がするのだ。見たものをどんよりとした空気に包み込むような負の力を、その時十六か七であつた藤原玲璃も持

つていたのである。

無論、見るからに暗そうな女子と関わり合いになるほど僕は不幸に好奇心を抱く体质ではなかつたので、なんか気まずいなと感じいつも、彼女を無視しようとした。胸のリボンを見る限り上級生だから、今後も関わることがないと安心していたのかもしれない。だから僕はその女性から視線を外し、今後三年間関わらないで過ごそうと、無意識下で思つたのだろう。

しかし、幸か不幸か、僕は初対面であつたその女性を無視できない状態になつてしまつた。ちょうどすれ違う時、たまたま彼女がこちらに寄つてきて接触し、相手がカバンを落としてしまつたのである。ばらまかれた私物の数々に、僕はさすがに無関心ではいられなくなつた。ごめんなさいと謝りながら筆箱や教科書、あるいは用途不明の布きれなんかを集め、手渡した。

彼女はにつこりと 僕から見れば薄ら寒い微笑みだつたが笑い、ありがとう、とお礼を言つて受け取つた。やたらと澄んだ声を聴かされた僕は、不覚にもその女性が何でもない普通の女の子だな、なんて思つてしまつ。暗いだけでただの上級生だな、と安心したのだ。

ただ、その安堵も長くは続かなかつた。

僕からいくつかの物を渡され、大した感情も示さず受け取つた女性は、膝を曲げた姿勢から立ち上がり、一度お辞儀をしてから去つていつた。変わつたところのない人だつたな、なんて思つてしまい、少し氣を緩ませ、彼女に集中しすぎた瞬間、あるものが見えた。

黒髪の後、彼の女性の背にいる《もの》を見てしまつたのだ。

その《もの》を見て以来、彼女との接触は極端に避けてきた。学食を食べる時も一番離れた席に座つたり、体育を木陰で見学している彼女を見つけたら気づかれないよう回り道を使つたり、藤原玲璃が《怪奇研究部》なんて部活を作つていることを知つたときも、そんな部活動がある部室棟には絶対に近づかないと心に誓つたのである。僕にとつてはそれだけ彼女の存在が怖かつた。いや、藤原玲璃

の後に憑いている『もの』が、恐ろしかつたのだ。

しかしどうしてだか、彼女についての噂は常に耳にしていた。自分で知ろうとしたわけではない、勝手に聞こえてくるのだ。藤原玲璃という女性は秋雨高校においてそれなりの知名度を有していたから、自然と情報を得ることができてしまったのである。

なぜ、下級生である僕の元に上級生である彼女の話が流れ込んでくるのか、といえば、それは藤原玲璃の秋雨高校における地位につた。彼女が入部して部長を務める怪奇研究部は、この学校では唯一公認されていない部活であり、本来は活動自体認められていない。しかし教師一同は藤原玲璃に何故か信頼を置き、部室まで与えているという現状があつた。そのおかしな状況に疑問をもつた生徒も多く、また、そんなミステリアスな彼女に惹かれた生徒も多かつた。

人間、不可思議なものには引かれてしまう性質で、それによって多くの在学生が彼女について知ろうとしたらしい。ある者は彼女が何故部室を与えられているのかと教師を問い合わせ、またある者は藤原玲璃の生態を探ろうとストーカー行為に走り、極端な者は彼女に告白して付き合おうとまでしたらしいが、結局、秘密を知り得たものはいなかつたらしいとのことだ。

いや、違う。実際に調べてみた人の話によれば、彼女はごく普通の女の子だったらしいのだ。今までの人生も普通で、入学してからの授業態度や生活態度もありふれた学生のそれだつた。ただし暗いだけの、実に善良な生徒だつたらしい。教師と何かしら親密な仲になつてしているわけでもなければ、逆に問題を起こして教員から怖がられているわけでもないのだそうだ。

ただ、ならば何故彼女がこの学校で特別扱いを受けているのかという問題が出てくる。教師に訊けば『藤原は前の校長の恩人だつたらしいから特別らしい』とぐらいしか言わず、何故特別になつたのか、何をして恩人になつたのかは、どの教員も生徒も知らないといふのが現状だ。

唯一事情を知っているであろう前校長先生も、去年この学校を去

つた。去り際に懇々藤原玲璃の名を口にして、彼女は特別に扱うようになると次の校長に伝えたのだそうだ。故に、彼女が特別扱いを受ける理由は誰も知らないし、誰も知ることが出来ないという状態に陥っている。

誰も、藤原玲璃についての『本当』を知らないのだ。

勿論僕も知らないし、知りたいとも思わない。元々関わらずに過ごし、卒業後も顔すら覚えていない人の一人として認識しているかかいないかもわからないような間柄になる予定だったのだから、別に知る必要もないだろうと思っていたのだ。

ただ、僕が一年生になつて初めて迎えた六月六日、事態は一転した。

友人から助けて欲しいと連絡を受け、信じられない相談をされた僕は、彼の頼みで代理として怪奇研究部に依頼をしなければならなくなつたのだ。かの部活動に訪れるということは、つまり藤原玲璃と再び出会うこと意味する。僕は怖かった。再び彼女と相見える時が。彼女の後に憑く『もの』が。だからこそ僕は相当躊躇い、電話をしてきた友人にそれは無理だと言つたのだが、泣きながら懇願されたため、仕方なく怪奇研究部に訪れることを承諾したのである。しかし、今こうして部室棟を歩く僕は思う。本当に藤原玲璃はこんな無茶な話を信じてくれる人物なのかと。怪奇という空想上の話が好きだけで、実際に本物の怪奇現象と対面したら怖くなり逃げ出してしまうのではないかと。だから僕は、友人の恋人が化け物になつたなんて話をこれから其の女性に相談しなければならない僕は、体感できるほど歩が鈍かつたのだ。

突然変異 ▲1 藤原玲璃（後書き）

『詩鳴堂』というホームページで載せている作品をこちらにも載せていただきました。連作予定です。完結はいつになるか分かりませんが、ネタが切れ次第完結とさせていただきます。

## 突然変異 へ2 畏が見える少年

校舎から渡り廊下を進んだ先にある部室棟。その薄暗くも活気に満ちた建物の中を進んだ僕は、とある一室の前で停止した。三階の一番隅にある、以前は理科室として使われていた場所だ。ここが、彼の部活動、怪奇研究部の部室である。

引き戸の前で佇んだ僕は、正直なところ迷っていた。このまま扉を開いていいものか、それとも戸を叩いてみるべきか、なんて些細な悩みではなく、このまま怪奇研究部に相談していいのかという問題を思慮していたのだ。何しろ、僕はこの部活についての活動内容は詳しくない。もしかしたら、単に怪談話が好きなだけの集まりかもしれないのである。

いや、集まりと言つても、部員は藤原玲璃一人だけなんだけど。散々思考を深めた挙げ句、結局僕は友人の頼み通り怪奇研究部に依頼をする、という結論に至った。元々僕が依頼するわけではないのだ。だつたら、僕に決定権なんて最初から無い。

勿論、単なる逃げだつただのだろうといふことぐらい、僕も分かっている。

ただ、やはり僕一人で勝手に線路を変更して良いような話題ではないのは間違いないだろう。友人の話が本当かどうかは不明だし、僕は半ばも信じていない。だが、もし真実だとしたら、それは大きな問題だ。一人の少女が怪物になつたなんていう話は信じられない。しかし、もし正しい情報と仮定するなら、そんなオカルト的な事柄を話せるのは、僕の知つている限り、怪奇研究部なんて部活を立て部長をやつしている藤原玲璃をおいて他にいないのだ。

結果的には、彼女に頼らざるを得ないのである。

意を決した僕は、一度、塗装の剥がれたドアを叩いた。返答は無い。もしかして藤原玲璃は部室にいないのではないか、とも思ったが、中に誰かいることは気配で分かった。この部室にいる人間は

ただ一人の部員である彼女以外有り得ない。返事をしないということは、何かの理由で答えられないか、意図して答えていないかである。

どちらにしても、中には分かっているのだから、と僕は躊躇いなく扉の取つ手に手をかけた。ゆっくりと扉を開けながら、中の様子を窺う。

「失礼します……」

部室内は割と乱雑していた。倉庫の中みたいに重ねられた椅子や机が大量に置かれている。その真ん中、一人の少女がいた。長い黒髪を垂らし、黒い双眸をやや斜め下に向け、膝の上に置いた本を読んでいる。分厚い本を読む彼女は、こちらに気づいていない様子だ。

「すいません。怪奇研究部つて、……ですか？」

やや調子のおかしい口調で声をかけると、彼女はゆっくりとこちらに顔を向けた。怪談番組で見る動く人形の様な動作だつたため、少々怖い。

「怪奇研究部はこの部室で間違いないわ」

彼女は本を閉じた。

しおりも挟まず、まるで誰かが訪れるまでの暇つぶしだつたと示すように。

「それで、何の用かしら。ただの冷やかしはお断りしているのだけど」

「からかいにきたんじゃないかもしれません。その、依頼をしたいと思いまして」

出来るだけ集中しないようにしながら、高校生らしい中途半端な敬語で話す。

「依頼、ねえ。確かにこの部活は怪奇なら何でもこい、どんな怪奇現象でも解決しますなんて触れ込みをしているけど、実際にされる依頼はありもしない心霊退治ばかりよ。名前は知らないけど、あなたもその類の相談をしに来たなら、悪いけどお断りさせていただく

わ

「その、靈退治ではないです。もつと奇怪な、信じられない話ですよ。ただ、僕も信じられていないので、本当に事実だ、という確証はないんです。僕も人伝に聞いて、依頼するようたのまれただけなので……それと、僕は相馬櫻そうまけやきつていいます。一年です」

名前は知らないという言葉に、僕は思わず名乗っていた。  
名乗れば関わってしまう確率が上がることも、知っていたはずなのに。

「そうまくやれ……変わった名前ね。けやきはじつちの漢字を使うのかしら」

「木偏に定規の規です。僕の家は昔から名前に木の名称を付けていたんですが、難しい方の櫻つて漢字は使えなかつたらしくて、簡単な方の櫻という名前になりました」

「そう、良い名ね。名前は大事にしなさい。人名はその人物の本質を表すらしいから。ちなみに、私の名は知つてていると思うけど、藤原玲璃よ。今後はよろしくね」

今後よろしくとまで言われてしまった。

なんだか関わらないといけないような予感を抱きながら、僕は本題を切り出すことにする。

「それで、藤原先輩。さつきも言いましたが、依頼の内容は信じて貰えないかもしません。本当に無茶な話なので……でも、依頼するよう頼んできた友人は、泣きながら懇願してきました。よっぽどの事態なんだつて思ったので、今日ここを訪れたんです。その本当に信じて貰えないと思うんですが、友人の恋人が化け物になつたらしいんです」

真剣な口調で話す僕に、藤原玲璃は冷めたような視線を向けてきた。

それでも、僕は話を続ける。

「言つていることが支離滅裂だったので詳しくはわからないんですけど、なんでも、友人の部屋で彼女が突然痛がりだし、右腕が獣みた

いに変質して、暴れ出したらしいんです。部屋を荒らしまわった後、友人の恋人、咲間貴美は窓から逃げてどこかに行ってしまったたらしくて。……それで、彼女を捜すことと、元の姿に戻すことが、今回の依頼内容、らしいです」

藤原玲璃は一度右手を顎に当てて。

「咲間貴美つて、一年の子よね。たしか小さくて可愛いからって、結構人気だとか風の噂で聞いたわ。まあ、彼氏が出来たらしいと広まつて以降、ぱつたりと話を聞かなくなつたけれど」

「結局みんな、彼女に彼氏が出来たからって諦めたらしいですからね……まあそれは置いといて、とにかく今回の依頼内容は咲間貴美の検索と、彼女を元の姿に戻すこと、なんだそうです。ただ、咲間貴美は学校にも来てないし家にも帰つていならしくて。彼女がどこにいるのかも、なんで化け物と化したのかも、わからないらしいです」

信じては貰えないと思いつつ、僕は話を一区切りした。

「以上が、僕の知っている限りです。これ以上詳しい話は友人の尾田に訊いてみないとわからないんですけど、引き受けてくれますか？」

問うと、彼女は訝しそうに僕を見ながらも、考えてくれていた。思考するときのポーズなのか、足を組み、右手を顎に当て、やや俯いていいるという格好で、思案してくれている。

僕としては、考へてくれるだけでもありがたい。失笑されて馬鹿にされるよりかはずいぶんマシだ。いや、こんな話を真剣に聞いてしまつている時点で、僕は藤原玲璃の人間性を疑っていたのかもしれない、もしかしたら僕が彼女を馬鹿にしていたのかもしれないが。

しばらくして、藤原玲璃は思考の体勢を解いた。

「受けける受けない以前に、状況がよく分からぬわ。もう少しヒントが無いと判断のしようがない。ただ、引き受けるだけの興味はあるわね。化け物になつた恋人、いいじやない。怪奇らしくて。まあ、それが本当に怪奇という類のものなのかなは、わからないけれど」

どうやら、興味はあるらしい。

引き受けてくれるかどうかは、まだ分からない。もしかしたら『化け物の相手は嫌だ』と断るのかもしれないし、『そんな話はやっぱり信じられない』と言い出すのかもしれない。

どつちにしろ、僕には彼女の決断に身をゆだねることしかできなかつた。

僕が思慮している間に結論をだしたらしい彼女は、一度溜息を吐いた。

「まあ、何でもこいつて触れ込みをしている以上断るわけにはいかないかしらね」「

そんな一言で、顔の筋肉が少し緩んだ気がした。

「それじゃあ、引き受けてくれるんですか？」

「そうね、仕方ないから引き受けるわ。ただし、条件付きね。まずはあなたが私の協力者に会つても『うり』こと、次に尾田という生徒に話を訊かせてもらつこと、それと」

彼女はそこで言葉を止めた。

何故区切つたのか分からず、僕はしばし困惑顔で彼女の発現を待つた。藤原玲璃は興味もなさそつた顔で一度後を向き、再び僕の方を向いて、端的に述べる。

「あなたが見えていいる『もの』について、教えてもらおうかしら」「鋭く射貫くような眼光が、こちらを見ていた。

細められた視線に、僕の全身は緊張感に満たされているのだと、理解した。筋肉が硬直し、体が思うように動かない。蛇に睨まれた蛙とはまさにこのことか、なんて余裕ぶつた思考をする程度に脳は働いていたが、頭から下の動きは突つ立つたまま止まつっていた。

「この教室に入つてきて少し経つたときから、あなたの視線は話している私に向けられていなかつた。まるで私後に誰かがいるみたいに、私の後方斜め上ばかり見ていたわ。そして、今の驚きようで確信を持つた。あなたは見えていいるんでしょう。私後に憑く『もの』が

確かに、僕には見えていた。

入学当初見た、彼女の後に憑く何か。霧をさらに曇らせたような靄が、今も彼女の後にびつたり張り付くように、浮遊している。形は人型に近いが、具体的な造形まではわからない。ただ、確かにそこに何かがいるということだけは、はつきりと見ることができる。

真実の一部を明かすように、僕は話し始めた。

「……はい。実は僕、体質的に靈が見えるんです。だから藤原先輩の後に憑いている靈も見えるし、街中を歩いているとき集中すると見えるんです。その、本物の幽靈が」

自分に何かが憑いていると知っているような口振りをする彼女は何を思ったのだろうか。

靈が見えるとか何を阿呆なことを言っているんだ、あるいは、靈なんてものがいるわけがないだろう、とでも思っているのだろうか。「でも、藤原先輩の靈は、なんか違うんです。全体が見えないと云うか、雲みたいだというか……とにかく造形が認識できないんです。だから正体がわからなくて、それで今まで避けてきたりしていました。……その、すいません……」

どつちにしろ、僕にとってこの秘密を話すこと自体、あまり好きではなかつたのだ。自分の特異的な部分を知られるということは、つまり、自分が人と違うことを知られるということである。人と違う人間は、総じて社会から省かれる。だから僕は怖かつた。自分が人間という枠から外されることが、どうしようもないぐらいに。「こんなこと言つても、だれも信じてくれないってわかつてます。藤原先輩も信じてはくれないと思つてます。でも、確かに見えるんですよ。本当に、集中するとはつきり見えるんです」

それでも、口は止まらなかつた。

全部を話してしまつた。

まるで言い訳を重ねるようだ。

僕の言い分を聞いた藤原玲璃は、くすりと笑つた。ああ、可笑しかつたんだな。僕の話は普通の人間の感覚で言えば結局は馬鹿にする対象になつてしまふんだ、と考えていたのだが、彼女はただ笑う

だけで、そこから嘲笑する笑みを浮かべることはなかつた。

やがて、彼女は口を開く。

「そこまで言わなくても、あなたが何かを見えることぐらい分かるわ。だからそんなに必死な態度で説明しなくてもいいのよ。焦れば焦るだけ滑稽だから。それと、私に憑いているのは靈とは少し違うわ。ねえ『さつき』、あなたは幽靈とは違うでしょ?」

彼女は、自分の後に向けて、さつき、といつ名前を口にした。

靈体に名前を付けていることには驚いたが、それ以上に、後に憑いている『もの』が靈ではないという発言が気になった。僕は数々の幽靈を見てきたけど、靈以外のものが見えたなんて覚えはない。彼女の後にいるそれが靈でないとしたら、一体何なのかと、気になつたのだ。

「あの、先輩も靈が見えるんですか?」

「靈は見えないし、靈体で見えるのは私の後に憑いている『さつき』だけよ。まあ、ちょっとした因果でこいつに憑かれていってね、それでこいつだけは見えるようになつているの」

口振りから察するに、さつきという名の靈体は女性らしい。いや、靈に性別があるかどうかはわからないのだが、藤原玲璃は自分に憑いているものを女性だと認識しているようだ。そうでなければ、さつきなんて女性名称を付けたりはしないだろう。

それにしても、藤原玲璃に何かが憑いているとは知つていたが、それを本人が知つてているとは驚きだつた。大抵こういう憑きものに憑かれた人は、お祓いとかで靈を祓つてしまつから、自ら受け入れ名前まで付けている彼女は、すこし特異に見えてしまう。

「まあ、その話はいいわ。別に人にする話題でもないし。とにかく今は事件に対応することから始めましょう。まずはここから移動するわ。私の協力者と会わないといけないし」

「協力者つて、どんな人なんですか?」

「怪奇現象を専門に扱う人、とぐらいしか私も知らないのだけれど、知識だけは確かだから、今回は彼を頼つていきましょう。相手は化

け物だしね、それについて詳しい知識を知つてから、咲野貴美をどうやつて捕獲するかを決める。まずはそこからね」

言つて、彼女は立ち上がつた。

読みかけの本を適当に投げ捨て、淡々と歩き始める。僕の横を素通りしていつた藤原玲璃の後を、僕は慌てて追いかけることにした。部室棟を進む中、藤原玲璃はとある注意事項を口にした。

「これから会う奴と対面しても、あなたは出来るだけ喋らない方が良いわ。あいつ人の心を弄ぶの好きみたいだし、知識だけはあるから、手玉に取られるわよ」

彼女の発言に若干の不安を覚えながらも、僕たちは校舎を出て、街へ向かつた。

突然変異 『2』 畏が見える少年（後書き）

なんとか2話更新できました。連作ものとして公開したのに続けられなかつたらどうしようかと、焦つておりました。これからも続けていきますので、よろしくお願いします。

## 突然変異 〈3〉 知りたいといふこと

午後六時過ぎの街中は、人通りが激しい。

僕と藤原先輩が訪れた中央街一帯は、まだ都心部として機能している場所なので、比較的通行人が多い。ちょうどこの時刻は会社から帰宅していく会社員や、学校終わりで遊びにふける若者、あるいは、こんな時間から寄引きをやつている若いお姉さん等が彷徨っている。

その人達に目的があるように、僕らは僕らなりの目指すものを持つて、高層ビルが立ち並ぶ街中を歩いていた。目的地は藤原先輩の協力者が住んでいる場所、らしいのだが。

「その協力者って、どこに住んでいるんですか？　ここいらだとマンションでしょうか？」

「廃ビルよ。なんでも、自殺現場となつて放置されていた場所を值切つて買い叩いたらしいわ。何度か言ったことがあるけど、汚い場所よ。ホコリまみれで鼠もいる、臭いし汚いし、私が大嫌いなゴキブリもわんさかいる。おまけに窓すら無いわ」

どうやら、それほど良い場所ではないらしい。

いや、別に住む場所なんてどうでもいいのだ。その人が安心して衣食住をこなし、寒さに耐えられる程度の防寒設備がある場所なら、人は生きていくことができる。もちろん、そんな感覚は僕が日本という恵まれた環境に生まれ、育ったからなのだろうが。

ただ問題なのは、そんな場所を選んだ藤原先輩の協力者だ。話によれば怪奇現象を専門に扱う人で、人の心を弄ぶのが好き、そして怪奇に対する知識だけはあるらしい。どんな人物かを先輩に訊いてみれば。

「先輩の協力者ってどんな人なんですか？」

「端的に言えば浮浪人。もっと短く言えば青年。さらに短く言えば奇人つてところね。一番短くて変。とにかく変わったやつよ。なん

で怪奇専門家なんて名乗っているのかは知らないけど、まあ、良い人ではないわね」

との説明なので、あまり期待のできる人物ではなさそうだ。

先行きが不安になりつつも、結局は解決してくれるのなら御の字だと思いつこにした僕は、早歩き気味で歩く先輩の後を追つた。会話は極端に少ない。いや、そもそも僕らに共通点なんて無いのだから、会話が弾むはずもない。そんなことは承知済みだ。

ただ、一緒に行動していながら殆ど会話がないというのもあります。これが気の知れた友達ならまだ安心感があるのだが、相手は年上の初対面であり女性だ。相手もこの状況が好ましくないと思ってるんじゃないかと心配してしまつのは、きっと僕が小心者だからなんだろう。

「あの、後どれぐらいで着きますか？」

早く着かないか、なんてことを思つての発言。

「あと三〇分ぐらい」

まだ長いのか、なんてことを知つての落胆。

この息苦しい状況をテレビアニメ一本分以上の時間我慢しなければならないのか。それは我慢強いと自称する僕だつて辛い。藤原先輩は会話なんて望む人ではないと僕の中で勝手に決めつけてしまつているが、僕は無言の時間というものがんまり好きじゃない。だから、こうして時折の会話だけしているだけというのは、なんだか心苦しく感じてしまう。

「えっと、先輩はなんで怪奇緩急部なんて作ったんですか？」

苦し紛れの問い掛けはそれだった。

彼女は歩を止めず。

「私はね、知りたかったのよ

「知りたかった？」

「そう。私自身に『さつき』が憑いたと分かつた瞬間から、今に至るまで、ずっと知りたいと思ってる。何故憑かれたのか、こいつはいったい何なのか、その正体を、理由を。だから怪奇研究部を作つ

て、ひたすらに怪奇を集められる状況を作ったの」

話す先輩はどこか遠くを見ていた。街中にある街灯やビルなんかよりももっと先にある何かを見るよつこ、視線を上に向けて黄昏れていた。

「とても悲しそうに。」

「あるいは辛そうに。」

「私はね、徹底的に知りたいのよ。自分に関する全てのことを見  
ああ、だめだ。」

「これ以上触れてはいけない。」

彼女の『知りたい』という欲求について、これ以上追求してはならない気がした。きっとその『知りたい』ということが彼女の本質で、それを僕が『知りたい』と思い聞き出すことは、彼女の根本的な部分を知ってしまうことになるからだ。

そんなことをしたら、彼女から離れられなくなる。

それは好ましい状況じゃない。話をすり替えないと。

「せ、先輩つて学校じゃ有名ですけど、実際どうして有名になつたんですか？」聞いた噂だと、前の校長先生に恩を売つて、それで部室までもらつているつて話ですけど」

話題を強引に変えようとしてみると、彼女は視線をこちらに向けた。表情は元の無表情、というよりは感情が見えづらい顔だ。仏教面とも言えるその面持ちを確認して、僅かに安堵する。

「恩を売つたわけじゃない。ただ、あの校長先生も憑かれてて、それのせいで色々と疲れてたみたいだから、祓つてあげたの。まあ、祓つたっていうよりは、抹消した、という表現のほうが正しいかもしれないわね。実際、物理的に憑いてた魂は消えたわけだし、とにかく」

そんな経緯があつて結果的に恩人扱いされている、と先輩は続けた。

靈が見える僕としては、その話自体信じられないわけではない。過去に本物の靈媒師と会つたこともあるし、實際除靈の現場も見た。

確かに靈が消えていく様は、抹消されたという表現が適しているような気もする。ただ、彼女が靈を祓つたというのがささか不自然なように思えた。自分で靈が祓えるなら、なぜ自身に憑いた靈を祓わないんだろうか、と。

「靈を祓えるなら、なんで藤原先輩自身に憑いているやつを祓わないですか？」

「ん？ ああ、校長先生のは私が祓つたわけじゃないのよ。ちょっと《さつき》に頼んで、消してもらつたの。ま、ちょっと殘忍な方法だつたけど」

手段が気になつたが、そこはあえて追求しないことにした。

単純に怖かつたからだ。

「ところで、私が有名になつたことについてだけど、私は別に有名になりたくてなつたわけじゃないのよ。学校でも普通にしていたし、家でも割と普通だつた。なのに何故か特別扱いされる。正直不服だつたわ。何にもしてないのに奇怪な人間のように見られるんですけど」

「何となくわかりますよ。僕も靈が見えるつて知られたときは大体氣味悪がられて、嫌な感じだつたし。人つて自分とは違う者を排除しようとするから、他人と違うと知らしめられるのは、ちょっと苦痛なんですよね。本当は人間なんて、みんな大して変わらないのに」「そうね。ただ、私としては違う意見を述べたいわ。人間は本質的には一緒だけど、肉体や精神は皆違う。だから特別な一人だから除外されて、省かれるから嫌なんじゃなくて、みんな特別なんだから私だけ特別扱いされるのは嫌、という感じね、私の場合は」

どうやら、彼女と僕とでは微妙に感覚が違うらしいのだが、少なうともちょっとだけ彼女を知ることが出来た。これは大きな進歩だ。もう少し歩み寄れば、彼女についてある程度のことをしれるかもしない。知れば、もう少しは話せるかもしない。

しかし、そこからが難題だつた。何しろ人伝の話しか先輩についてはしらなかつたわけで、当然藤原玲璃という人間については他人

事だ。だから詳しい趣味とか趣向とか、そんなものは知っているはずもない。故に。

「好きな歌手とかいますか？」

「音楽はあまり聴かない」

「好きな本とかは？」

「好きとか決めて無いわ」

「趣味はありますか？」

「情報集め」

なんだか、高校生相手の面接みたいな状態になってしまった。

そのまま僕が質問しては彼女が答え、というやりとりを延々と一〇分ほど繰り返し、いい加減僕の話題も底を突き始めた時、ようやく藤原先輩の足が止まった。

やつと着いたか。若干荒くなつた息を整えながら、藤原先輩がその小さな顔を向けている方向を見て、思わず絶句してしまった。

そこにあつたのは、廃ビルなんでものじゃなかつた。窓もない、ドアもない。コンクリートもむき出しのままで、工事中という看板が付けっぱなしになつていて、建設途中で放り出されたとしか思えないビルまがいのそれが、僕らが目指していた場所だつたようだ。

「さ、入るわよ」

言つて、藤原先輩はフェンスを押しのけて中に入つていいく。僕は夜の工事現場に踏みいる小学生のような気分を味わいながら、後を追つた。

携帯の画面を開いて時計を見る。時刻は午後七時、もう口は落ちていた。

## 突然変異 『4』 IIつのヒント

廃ビル、というよりは、もはや廃墟と化していた建造物に不法侵入した僕たちは、玄関口から入つて階段を上り、三階の一室の前で足を止めた。三一号室と書かれた名札がかけられている以外、ドアすら無くないその部屋に、藤原先輩の協力者がいるらしい。

開け放された状態となんら変わらない入り口から、中の様子を窺つてみる。室内には四角形の箱がいくつも置かれていた。形状や取っ手部分、ダイヤル部分が付いていることから、箱形をしたそれが金庫であるとわかる。頑丈そうなもので、簡単には壊れそうになかった。

何故こんな場所に金庫が置いてあるのかはわからないが、今捜しているものは箱などではない。僕は室内をくまなく探し、一番大きな金庫の後に、一人の男性を発見する。

「こちらからでは、男性であるということと髪型ぐらいしか分からない。染めたのか、純白の短髪をしているその男はこちらに気づいたのか、後ろを向いたまま片手を上げた。

「玲瓈が自分から来るなんてめずらしいじゃない。なんか厄介事でも抱えてきたのかい？」

左手をぶらぶらと左右に振る男は、中性的な声で告げてきた。「ちょっと聞きたいことがあつてきたわ。まあ、本当はアンタの顔なんて見たくないんだけど」

「はは、つれないねえ。まあいいけどさ。で、そちらの殿方は誰かな？」初めて見る顔だけど」

僕たちとは逆の壁を向いているはずなのに、僕の存在を的確に捉えていた様子の男は、金庫に隠れていかない首から上を動かし、こちらを見てきた。美青年と呼べるほどには整っている顔で、瞳は青かつた。カラーコンタクトでも付けているのだろうか。

「今回の事件を持ち込んだ人よ。名前は相馬槻。まあ、かれは代理

らしいから、彼自身は特に何も無い少年よ。特別な力も持たない、ただの一般人」

「へえ、何も無いね。それにしては何か見えているみたいだけど。ま、そこは追求しないでおくかな。はじめまして槻くん、僕は轟木白。変わった名前同士、よろしくね」

藤原先輩は僕の体質を隠そうとしたようだったが、轟木白と名乗った青年は、どうやらすでに見抜いているらしい。藤原先輩がそうしたように、視線を追つたかもしないし、もしかしたら怪奇専門家として、何か判断する術を用いているかも知れない。

どっちにしろ、僕は少しばかり緊張せざるを得なかつた。僕の体质に気づいた人はそれなりにいたが、初対面ですぐさま見抜かれたのは今回が初めてだ。見抜きづらいものを見抜けるということは、つまり轟木白という人物は普通じやない感覚を持つてているということになる。僕が幽霊を見ることが出来るように、彼は人の秘密を見ることができるのかも知れない。

そんな馬鹿げた考えをしている間に、轟木白は立ち上がつた。動くのも面倒くさそうだと言わんばかりの面持ちで、先程までたれかかっていた金庫の上に座る。

「さて、世間話も何だし、早速本題に入ろうか。今日はそれを話しへ来たんだろうし、それ以外は話したくないんだろう？ だつたら、さつさと本編にいこうじゃないか」

「話が早くて助かるわ。で、今回の厄介事については、今のところ断片的な情報しかない。咲間貴美つて女の子が化け物になつたらしいんだけど、具体的な情報についてはほとんど無い。どんな形状の化け物だつたのか、どうして化け物になつたのか、そこら辺は全く分かつていな状況よ。情報不足すぎて判断できないかも知れないけど、知恵を貸してちょうだい」

「んー、化け物になつたってだけだと何とも言えないかなあ。怪物に変化した怪奇物語なんて沢山在るわけだし、見た目的にどんな化け物になつたかもわからないなら、判断のしようがないね。もうち

よつと詳しい情報が知りたいかな」

言いながら、轟木白はこちらを見てきた。どうやら、僕から出る情報に期待しているらしい。とは言つても僕は大した情報を有していない。此の事件については電話で聞いた程度の情報しかないのだ。詳しく述べる内容なんて持ち合わせていない。

それでも、多少は役に立つだろうと思い、知つてることを伝えようとした。

「あの、電話で聞いた限りなんですが、なんでも形状は三本の巨大な指だつたらしいです。鋭い爪が付いていて、それで襲われそうになつたとか。で、それ以外にも足が異様に筋肉質になつたとも聴きました。足の筋肉が盛り上がつたんだ、と泣きながら言われました」

轟木白は興味深そうに頷き、片手を額に当てた。

「ふむ、三本の指つてことは『竜の腕』かな。でも、怪奇現象で竜の腕になつたなんてものは無いはずなんだよね。足が筋肉質になつたつてのも妙だ。化け物に憑かれて体が変化したら、体毛に覆われてもいいはずなのに、筋肉が確認できる程度に肌は出ている。妙だね、僕はそんな怪奇は聴いたことが……いや、までよ。あるにはあるかもしれないね」

意味深そうに咳く轟木白は、頭に手を当てながら上を向き、思案し始めた。藤原先輩にもあつたように、これが彼の思考ポーズなのがもしかれない。

しばし思案していた様子の轟木白の口が、僅かに歪んだ。微笑みとも嘲笑とも取れる曖昧な笑みは、薄気味悪ささえ感じさせる。答えを見つけたから笑つたのか、それともそんな事例に出会えたことで笑つたのかはわからないが、僕は思わず恐怖を感じてしまった。

「ああ、今思い出したんだけどさ」

思考の格好を解いた轟白は、顔をこぢりに向かた。

「あるよ。今回の事例とは少し違つけど、該当する話が過去にある。ただし、それが本当に正しいとは限らない。何しろオカルトも真つ

青のとんでも事件だから、本当に起きたことなのか、それとも単なる噂話なのか、そこら辺の真意もわからないんだけど

指を絡めるよつて組み、組んだ左右の手の上に顎を載せた轟木は  
神妙そうに手を細めた。どうやら、彼にとつても過去の話とやらには  
は特異的な部分があるらしい。怪奇専門家なんて名乗っている彼が  
とんでもない事件とまで言つからくな、それなりの事だつたのだろう  
う。

「ま、それでも知りたいっていうなら教えても良いんだけど、だけ  
どね」

もつたいぶつたように、轟木は言葉を濁した。半笑い気味ではぐらかされると、僕としても多少は怒りがこみ上げてくるが、今は我慢だ。こんなところで協力しないと言われたら最悪だし、それで藤原先輩に迷惑がかかるのも嫌だ。

「単純に教えるだけじゃつまらないなあ、それじゃあ『知る』ことの本質的意味が否定されちゃうし。どうしようかなあ、教えようか教えまいか、決めかねるなあ」

ପ୍ରାଚୀ

「はは、玲瓈は僕をよくわかつてゐるね。その通り、今回も僕はヒントだけ出そうと思つてゐる。人間探求心を捨てちゃいけないからね、全部が全部教えられたら怠けてしまうから。だから君たちの追求する心を捨てさせないため、ヒントのみを出して上げよ!」  
単に意地悪しているだけだ、と内心で呟いてしまつが、声に出したりはしない。

ここに来る前説明されたとおり、轟木は人の心を弄ぶのが好きなようだ。こうして僕たちを困らせて、それで楽しんでいるのだろう。子供みたいな性格だな、と思うけど、それはさすがに言つてはならない。藤原先輩に注意されたとおり、発言は最小限にしよう。

「エヘン」。一つは《明治五年の脱獄囚》。二つ目は《癌と突然変異》。三つ目は《韓国の映画》だ。これらのヒントを一つず

つ調べて、ちょっとと考えれば答えが出るよ」

人差し指と中指と薬指を立てながら、轟木はヒントを提示した。言われただけでは何のことだかまったくわからない。三つの言葉の関連性すら不明だ。

困惑している僕とは対照的に、藤原先輩は示されたヒントをポケットから取り出したメモに書き写し、直ぐさま行動を始めた。振り向き、その場を去つていこうとする。

「ご教授ありがとうございました。事件が解決したらおにぎりぐらいならおひこあげるわ」

慌てて僕も追いかけた。去り際に言い残し、轟木には目もくれず去ろうとした藤原先輩は、長い長髪を揺らしながら階段を下りていった。

「そうだ、玲璃に憑いている奴については分かつたかい？ 僕としては答えを知っているけど、君がさつさと気づいてくれることに期待しているんだよね。知識は共有したほうが良いし、共通の話題があれば、もう少し会話も盛り上がるしね。なんなら、追加のヒントをだそうか？」

「ヒント出すぐらいなら答えを教えなさいよ」

階段を下りる最中、後方からそんな声が聞こえ、藤原先輩は端的に答えた。

轟木という青年を置き去りにし、薄暗いビルの階段を下りた僕たちは、街に出た。夜の繁華街は騒音に満ちていたが、不思議と五月蠅いとは感じない。雑音が風景としてその空間に溶け込んでしまっていることに、僕という現代人は慣れているからだ。

歩を進めるが、目的地はわからなかつた。尾田の家はまだ教えていないし、学校に向かっているわけでもない。どこに行くのだろうか。気になつた僕は訪ねずにはいられなかつた。

「どこに向かつているんですか？」

「私の家よ」

目的地は藤原玲璃宅らしい。

「そうですね、もつ夜も遅いですし、家に帰つて寝てから調べてもいいですよね」

「そうじゃないわ。私の家に用があるの。当然あなたもきて、一緒に調べてもらうのよ」

「調べる?」

「私の家には、古い情報を集めた情報誌みたいなものがあるの。なんでも先祖の人人が始めたらしくて、代々事件とか新聞の記事とかを積み重ねてきて、後生に残そうとしているらしいの。で、私がそこ

の家系の子孫つてわけ」

どうやら、藤原玲璃の家族は生糸の情報収集家らしい。彼女の趣味も情報集めだつたし、もしかしたら怪奇研究部をして怪奇を集めのり、趣味の一環もあるのかかもしれない。

「さ、早く行くわよ。夜の街は物騒だから、さっさといかないと。街中を移動中に襲われたりしたらあなたに守つてもらうから、その時はよろしくね。私をナンパしたり襲つたりする奴なんて、一般人なら有利得ないわけなんだけど、まあ、化け物に襲われたりする場合もあるわけだし」

「さすがに、街中で化け物に襲われたら助けられません」

半笑いでそんな事をつぶやける程度には、僕の緊張もほどけていた。

僕たちは歩いた。中央街を抜け、まだ自然が残っている田舎道を進んでいく。道中不審者を何人か見かけるが、突然化け物と化した咲間貴美に出くわすわけでも、あるいは幽霊が僕たちを襲つてくるわけでもなく、僕と藤原先輩は、気まずい雰囲気を保つたまま移動した。

やがて、一軒の古い民家の前で、藤原先輩が立ち止まる。

「ここが私の家よ」

家には、藤原という表札が付けられていた。

## 突然変異 『4』 IIIのヒント（後書き）

ようやく物語が展開してきました。今後はもつと流れのよつた文章が書きたい、と思いつつも、それが出来ない現状も分かっていります。

読んでいただきありがとうございました。近日中に続きを載せますので、ご期待下さい。

## 突然変異 へ5 調査一

藤原玲璃とその家族が住んでいる家は、古びた日本家屋家だった。今にしては珍しい木造の家屋。門扉も木でできており、庭には小さな池まである、純和風の家だ。盆栽が置かれていたり、灯籠が設置されたりと、かなりお金かけたと思われる作りになつている。もしかしたら、ある程度金銭的に余裕のある家族なのかもしれない。

そんな些細なことを思いつつ、お邪魔しますと言いながら敷地内に入った。藤原先輩も一緒だつたためそれほど躊躇はなかつたが、それでも今は午後八時である。家の人に迷惑がかからないように静かにしなければ、と多少なりとも思う程度には、僕も常識人だ。できるだけ物音を立てないようにしながら、敷地内を進んだ。

「資料は全部倉庫にあるの。家に寄つても面倒だから、直接いくわよ」

家屋そのものには入らず、脇道を進んで家の隣にあつた倉庫らしき建物に向けて歩いた僕たちは、古びた木製の扉の前で停止した。腐りかけの木板に金属の取っ手を付けただけのようなその戸に付けられた錠前を、藤原先輩はカバンから取り出した鍵を使って、開けた。

「扉あけるから手伝つて」

鋸びた車輪が回る音と、何かを引きずる鈍い低音を響かせながら、藤原先輩と僕は戸を開けようとした。内部から溢れ出たホコリと力ビ臭い匂いが襲いかかってきて、思わずむせてしまつ。喘息持ちだったら危険だったと考えながら、引き戸のようになつていてる扉を最後まで引いた。

「はあ……はあ……とりあえず全部しまいましたよ先輩、中はどんな風になつて」「

収納場所に重い扉を押し込んだ後、不意に倉庫の内部を見て、思

わず息をのんだ。

倉庫内には所狭しとファイルやケースが並べられていた。棚を大量に設置し、余すと無く並べてある。収納道具は新しいもののようだが、透明な入れ物から覗く資料は、かなりの年期を感じさせるものだった。どれも、古い藁半紙のような色をしている。

「すごいですね……これ何年ぐらい前から集めているんですか？」

「正確にはわからないけど、太平洋戦争が始まるより前には、すでにつつたらしいわ。一応一番古いので三百年ぐらい前の手記があつたんだけど、どこだつたかしらね。一人で整理したときにバラバラにしまっちゃつたから、どこにあるかわからないんだけど」

この資料の山を一人で整理したらしい藤原先輩は、早速取りかかるぞと言わんばかりの勢いで、すぐ側にあつた棚からファイルを一つ取つた。一枚ずつめぐりながら、興味深そうに新聞や手記を黙読している。

「さ、櫻君も適当にとつて捜しなさい」

「捜すつて……見た限りトン単位の資料から何を捜し出そつて言うんです？」

「ヒントの一つ目『明治三五年の脱獄囚』についてよ。明治三五年と時間まで指定してきたということは、その年の新聞か手記でもあれば、もしかしたら載つているかも知れないと考えたの。勿論、その年に新聞が出てたかどうかなんて覚えてないし、手記も毎日分残つてない。なにより『事件と関係のある事柄』が載つているのかすらわからないから、外れかもしれないけど、でも、何もしないよりはましじゃない。少しでも可能性があるなら、先ずは調べないと」  
言いながら、藤原先輩は一番左端にあつたファイルを元に戻し、二冊目に取りかかつた。

思わず、溜息を吐く。彼女の言つとおりだ。何かを知りたいなら調べればいい。この情報の山から探し出すのは至難の業だが、友人を助けるため、探さなければならないのだ。今回の事件に関連しているらしい、『明治三五年の脱獄囚』について書かれた、記事を。

適当に一冊のファイルを手に取った。開いてみると見た事もない文体で字が書かれており、多少困惑する。いつか国語の授業でこんな古めかしい文字を見たことがあったな、なんて思い出しながら、資料を翻訳してはページを進め、読み終えて棚に戻し一冊目に取りかかった。

一冊、二冊、四冊と読み進めて、いつたいどれだけの時間が過ぎたか分からぬほど読み続けていた内に、集中力に乱れが出始めた。二度読みしたり、不意に藤原先輩の方向を見たりしながら、それでも書物をあさり続ける。

「なかなか出てこないですね」

「在るかどうかも分からないから当然ね」

当たり前だが、そう簡単には出でこなかつた。なしろ在るかどうかすらわからないのだ。もしかしたら無いかもしないものが、楽に手に入るわけがない。

「…………ふう…………」

黙々とページをめくっていた僕だったが、やがて疲れが出始めた。元々夜型ではないので、深夜の作業には向いていない。携帯電話を開いて確認すると時刻は午後十一時。どうやら、ここに来てから三時間が経過していたようだ。この時間帯にはもう寝ている僕にとっては辛かつたが、協力してくれている藤原先輩は休んだり視線を外したりすることなく、調べ続けている。

真面目、というか、何故か時々顔をほころばせていたりする。それを確認する程度に、息抜きもかねて、あるいは気分転換も含めて、または目の保養で先輩を見ていたのだが、ふと疑問に思った。彼女は、なんでこんなにあつさりと僕の相談に乗ってくれたのだろうか、と。

考えてみれば、おかしいと気づくことができる。彼女が部長を務める怪奇研究部は、依頼として怪奇なら何でもこいという触れ込みを掲げているが、『依頼』という形式上、報酬が必要だ。だが、彼女は何も要求してこない。何の見返りもないのに、こうして協力し

てくれている。

何故だかはわからない。後で多額の金銭を要求されるのでは、とも考へたが、藤原先輩がそんなことをしてくるとも思えないほどに、僕は彼女について知つてしまつていた。知つてゐるからこそ、彼女がなんで協力してくるのかも、何となく推察できる。

「藤原先輩は、なんでこうも簡単に協力してくれるんですか？」

一応、確認をしておこづ。そんなことを思いながら話しかける。

返答は無い。こちらを見てもいない。

「正直、僕も信じられた話ぢやないと思つてますし、見返りが欲しいわけでもなさそうですし。ならなんで助けてくれるのかなって……勿論、僕としては助けてもらつて嬉しいですけど……ただ……その……なんでかな……つて……」

問い合わせに、先輩はしばらく答えなかつた。

考へているのか、それとも無視しているのかの境目はわからないが、僕としては答えて欲しい。当然だ。知りたいという欲求は人間なら誰だつて持つてゐるんだから、それが先輩のように強いわけでない僕であつても、知つてみたいと思うこともある。

しばらく、沈黙が続いた。

やがて、藤原先輩は一度吐息を吐き出し。

「知りたいからよ」

端的な答えたつた。

もう、それ以上の理由なんていらないと言つてゐるような程に。先輩はゆつくりと語り始めた。

「こうして『怪奇現象』なんてものに関わっていくのは、いえ、いろんなことを知つていくのは、私としては楽しいの。あんまり表だってはしゃいだりはしないけど

口調は緩やか。表情は僅かに温か。

「なんていうかね、物語を見ているような感じなの。自分は当事者じゃないけど、それを知る権利をもつていて、関わることもできる。そういう『楽しめる程度に知る』ことに、純粹に興味をもつてゐる

のよ。だから、私は今回あなたに関わることを決めて、知ろうとした。事件について、咲間貴美について、尾田という人について、そして、あなたについて

楽しい、と彼女は言った。

知ることが楽しくて仕方がないのだと。

「それらに関わることは、私としてはマイナスかもしれない。それでも、知ることによってプラスになるかもしれない。だから知ろうとした。関わってしまうおうと思ったのよ。知つていけば、知り続けるほどに、誰かとの関係も強くなつて、お互いのこともわかり合えて、正しい判断もできるし、間違えることもない。だから私は様々なことを知りたいと思う。その深念があつたから、今回の事件を引き受けようと思ったの。まあ、大変だとは知つていたけど」

ああ、そうなのか。

藤原先輩はただ《知りたい》だけなのだ。

知りたいと思う程度に気になる事柄があつて、知りたいなあと思つて、知りたいと強く感じて、知りたいという欲求を満たすためだけに、知りたい、知りたいと調べ続ける。

ただ、それだけなのだ。それ以上のものは必要無い。

ただ《知る》ことさえできればそれでいい。

そう、彼女は示していた。

「まあ、本音の所は、知らないと落ち着かないから、なんだけどね」  
そう纏めた先輩は、もう何十冊目になるかわからないファイルを手に持ちながら、こちらを向いた。僅かに笑みがこぼれる。儂げで、それでいて強い、微笑みだつた。

僕は、一度息を吐いた。

「先輩

彼女が何故そこまで知りたいと思うのかはわからない。だから、知らないからこそ、僕は純粋に、知つてしまいたいと思った。藤原先輩がどうして、それほどにも知ることについて拘つているのか、いや、藤原玲璃という人間についての全てを知つてみたいと想つた

のだ。

「いつか、先輩のこと、話してくれませんか？本当に、いつでもいいので。僕もなんだか、あなたについて知つてみたくなりました」どうしてだかは、それこそわからない。彼女とは関わらないいつもだつたし、その方針は変わつていない。それでも、藤原先輩について知つていこうと、知つてしまおうと、本当に何の考えも無い單なる感想として、思ったのである。

先輩は笑つた。

多少困つたような笑み。

「そうね。話す機会があれば話してあげるわ」

言いながら、それでも手の動きと目の動作を止めない藤原先輩から、僕は視線を外した。なんとなくだが、もう会話はいらない気がしたのだ。ここからはひたすら知ることだけに気をつけて、資料をあさることにしよう。

先程疲れていた時より、少しだけだが軽い気持ちになつた僕は、もう何冊目かもわからないほど読んだ資料の山に、再び挑むことを決めた。繰り返される作業の中、時折時計を確認する。一時間、二時間と、大して忙しくも遅くもない速度で、時間は進んでいった。どれほどの時間がたつたのだろうか、やがて朝日が窓から入り込んだ。

もう朝か、と少々疲れた寝ぼけ眼をこすりながら、僕は座つたままの体勢で背伸びをした。長時間座つていたからだろうか、少し足が痛い。動かし続けていた手も痺れている。

時刻を見るために携帯電話を開くと、午前六時を示していた。かれこれ十時間もここにいたことになる。これだけの時間調べものをしたのは、生まれて初めてかもしない。

そういえば家に連絡入れてないな、なんて些細なことを気にしながら、藤原先輩を見る。彼女は少しばかり眠そうに上瞼を下げ、時々顔を上下に動かして、今にも眠つてしまいそうだつた。もしかしたら、朝は弱いほうなのかもしれない。

「先輩、そろそろ休んだほうがいいですよ。残りは僕が調べておきますから」

「そういうわけにもいかないでしょう。確かに休みたいのは事実だけど、途中で投げ出すわけにはいかない。中途半端などここで投げ出すのは嫌いなのよ」

言いながら、先輩はファイルを一つ取り出した。ぱらぱらと捲り、中に収納されている記事を調べていく。そんな真剣な彼女を心配してしまったが、僕は止めようとまではしない。

誰も彼女が『知る』ことを止められないと思つたし、止めるのも無粋かと感じたのだ。

勿論、藤原先輩がふらつき出したり、倒れそうになつたりすれば、無理にでも休ませる気だった。家は近いというより敷地内だ。いつだって家屋に戻つて休むことができる。どうせ一日がかりでも終わらないような量なのだ。多少時間がかかるても仕方ないだろう。

そうやってもしもの時を考えながら、僕は資料を手に取つた。もう数は数えていない。どれだけのファイルを読み終えたのかも分からぬが、十や一〇といつ単位ではないのは間違いないだろう。積み重なつた情報の山は、もう僕の身長を超えていた。

疲れた手でページを捲り、またこれも外れかと思つて横に置こうとした時。

「楓君、私たちが調べているのって明治三五年の脱獄囚についてよね？」

そんな、確認するような問い合わせ藤原先輩から放たれた。

「そうですけど……どうしたんですか先輩。まさか長時間の調べ物で頭がやられたとか言い出しませんよね」

「違う、あくまで確認。もしかしたらこれなんじやないかな、と思つて」

先輩は近づいてきた。一冊のファイルを抱え、僕の隣に座り込んだ彼女は、古い資料の一部を指差した。僕は指の先に刮目し、手書きだと思われる記事の内容を見て、少々困惑した。漢字とカタカナ

を混ぜたような文体で、ひたすらに字が書かれていたことにも困ったのだ。しかし、紙の上部に表記された文字が、『明治三五年』という意味であることだけは、わかつた。

「なんて、書かれているんですか？」

「かみ砕いて言うと、明治三五年に宮城の刑務所から脱獄した死刑囚がいた。その人は後に捕まり処刑されたけど、謎が数多く残されている、と書かれているわ」

先輩は目線を動かしながら続ける。

「その疑問についても書かれている。脱獄した男は牢を壊して逃げ出しだが、どうやって鉄格子を？ 切断した？ かがわからないこと。また、当時としては表だった事件にならなかつたこと。つまりは、何かの理由で隠蔽しなければならなかつたこと。それに、彼が脱獄した時監守をしていた人は、囚人が？ 化け物になつた？ と答えていることもまた、謎だつたらしいわ」

聴いてみれば、疑問だらけの話だつた。

「鉄格子を切断つて……仲間がいたんでしょうか？」

「さあね。ただ、当時の文明的な状態を考えれば、刑務所に忍び込んで機械なんかを使って鉄格子を切断するより、鍵を盗んで逃走したり、内部から脱出経路を確保したほうが無難だとは思うけど。それよりも問題は、化け物になつた、という部分ね」

化け物。

一瞬で、咲間貴美という少女を思い出した。

「もしかしたら、咲間貴美も同じような事例なのかもしれない。だから、この囚人がなんで化け物になつたなんて言われているのかを考えれば……いいえ、仮に本物の怪物になつたと仮定して、なぜそうなつたのかを突き詰めれば、変身の理由がわかるかもしれないわね」

「なるほど……その囚人についてはなにか書かれていないんですね？」

「囚人の名前は……ごめんなさい、滲んでて読めない。ただ、右下

のほうに彼のプロフィールみたいなのが書いてある。歳は当時四歳、元々強姦殺人をして死刑囚となつたけど、末期の癌で余命が残り僅かだつたらしい……ああ、なるほど……」ここで第一のヒントに繋がるわけね

何かを察したらしい藤原先輩は立ち上がつた。資料を持ちながらふらふらと歩き始める。

「さ、ここにもう用はないわ。いきましょうか、楓君

「え……あ、はい」

言われながら僕も立ち上がり、外に出て行く先輩の後に続いた。朝日は眩しく僕らを照らし出し、風はなかなかに気持ちが良かつた。調べ物も終わつたし、一度家に帰つて寝たいな、なんて思つていると。

「とりあえず、『飯だけでも食べていきなさい。このまま学校いつたら倒れるわよ』

「え、学校？」

「ちょっと大丈夫？ 今日は金曜日。当然学校もあるわ。調べ物して疲れたんで休みますなんて理由は通じないし、休むわけにもいかないでしよう」

失念していた。考えてみれば昨日は木曜日。まだ休日まで一日あつた。

ということは、このまま、眠たい状態のまま、授業を受けないといけないのか。

「言つておくけど、休むことは許されないわよ。私は皆勤賞が架かつていてるし、あなただけ休むなんてことも許さない。それに、学校で調べないといけないこともあるしね」

本音を言わせてもらえば、帰つて寝てしまいたい。ただ、学校でやらなければならぬことがあるのなら、休むわけにはいかない。学校ということは、おそらくインターネットかなにかで第一のヒントについて調べるのだろう。調べるものは『癌と突然変異』、キーワードを入れればすぐに出てくるはずだ。

「一つ目は簡単に見つかりそうだ、と少し安堵していた僕の肩を、  
藤原先輩が叩いた。

「で、家でご飯を食べてもうひじょうたって、君を家に入れないといけないわけなんだけど。二つ、こえ四つほど注意事項があるわ  
「なんですか？」

「一つ、私は家に男の子を呼んだことが無いこと。二つ、家に男の子を呼べば家族が勘違いをすること。三つ、私たちは朝帰りの状態だということ、つまりは変な誤解を生むであろうことが予想されること。それともう一つは、私たちにはその間違いを正すだけの余力がないこと」

聴いてて不安になるようなことを、先輩は言つた。

「つまりは、勘違いされた状態で固定される危険性が高いこと」  
僕とそういう仲だと思われることがよっぽど嫌なのか、どんよりした顔で先輩は告げてきた。言われると僕も不安になつてくる。いや、勘違いされた先輩が困るだろうな、という意味で。

いや、もし変な誤解をされたら、それはそれで嬉しいんだけど、なんてことを思う程度に、僕はまだ純情だった。しかしそんな間違いを認識されてしまう先輩のことを考えると、やつぱりダメだよなあ、なんて考えを巡らして、なんだか恥ずかしくなる。

「ま、勘違いされたら事実にしてしまえばいいんだけど

「え？ なにか言いましたか？」

思考を巡らせていく間に先輩の発言を聞き逃してしまった。そろそろ僕の疲れも限界に近づいているのだ。このまま家に帰ると途中で倒れてしまいそうだ。

「別に。さあいくわよ。少しぐらいなら寝られるかもしれないし  
先輩はこちらに顔を見せず、歩いていつてしまつた。

やけに早足だった気がしたが、気にせず僕も続いた。

## 突然変異 『5』 調査一（後書き）

長い間お待たせして申し訳ありませんでした。引っ越しなどをしていて更新ができなくなっていた、というのは言い訳ですかね。まだまだ続きますので、どうかご試聴よろしくお願ひします。

藤原先輩の家に足を踏み入れてから一時間後、僕と先輩は二人して通学路を歩いていた。先輩の予想通り勘違いをされた僕達は、先輩のおじいさんの説教とお父さんの慰めを受けた後、お母さんのにやけ面に見送られながら、藤原家宅を出発したのである。

朝食をいただいておいてあれだが、僕としてはかなり気まずい状態だった。家族が殆どそろう中、全く部外者の僕が食卓に混じっているのだから、仕方のないことだったのかもしだれないと、それでも、もう少しおだやかに食事を取りたかった。

結論から言えば、僕達は勘違いを払拭することなく家を出てきた。先輩は酷く面倒くさそうに父親、あるいは母親の相手をしていたし、僕としても対応する気力が無いほどに疲れていたので、最終的には先輩が僕の手を強引に引っ張つて逃げてきた次第である。

その行動が余計な誤解を生んでないことを祈るばかりだ。

「はあ、全く……家の人は本当に勘違いばかりで困るわ。この前も夜十時に帰つただけで『男と会つてきたんだろ』なんて勘違いされたし。今時の子供ならその時間ぐらい普通なのに」

「はは……大変ですね」

十五分程度の仮眠を取つた先輩は、大して疲労の様子を見せてはない。

無論、他人の家で眠る事が出来るはずもなかつた僕は一睡もしていいわけだが、たかが十五分しか寝ていらない先輩も同程度に眠たはづだ。それでも彼女が気丈に振る舞つているのは、僕に疲れた姿を見せたくないからなのかもしだれない。

先輩らしい所を見せたい、とかなんだろうか。

そうだとしたらすこし可愛いな、と思う。

「? どうしたの櫻君。さつきからこつちを見て

「い、いえ、別に」

「そう。 そう言えば楓君は着替えていないし、私もお風呂に入つていいわけだけど、臭つたりはしてないわよね？ ちょっと臭いが気になるんだけど」

先輩はやけに親しそうにこちらに話しかけてくる。通学路を歩き始めてからは会話の数も増えていた。昨日全く会話をせず二十分近くも歩いた相手だとは思えないほどに、口数が多い。

「分かるほど臭くはないですよ。若干ホコリっぽくですが」

「ならないわ。個人的には出かける前にお風呂に入つておきたかったんだけど、家があんな状態だし、あの居心地の悪い空間にいるよりは、臭いまま家を出た方がましだったから、仕方ないかしらね」髪を弄りながら、先輩は愚痴混じりにそんなことを呟いてくる。身だしなみや臭いを気にするあたりは、普通の女の子なんだな。大人っぽい雰囲気を醸し出しているから、そこら辺を忘れてしまつていたが、まだ十七か八ぐらいなのだ。女性らしい考えを持つて当然か、とも思う。

そこで、ふと、考えてみれば女生徒と一緒に登校しているのだと、いうことに気づく。女性関連の薄い僕としては異例の事態だが、不思議と緊張感は無い。一晩一緒にいた流れというものもあるし、なにより、今の先輩は疲れて弱っているからなのか、人当たりがいい。その点も僕の緊張を和らげる要因となっているはずだ。

先輩が常にこの状態なら、容姿は良いんだし人気出るだろうな、なんて考えていると。

「ところで楓君。これから行動を確認しておくんだけど」

藤原先輩の言葉に、僕は耳を傾けた。

「まず私たちは普通に授業を受け、放課後コンピュータールームか図書室に行く。そこにパソコンがあるはずだから、それを使って『癌と突然変異』について調べよう、と考えていたんだけど、それでいい？」

口調が若干重いのは、眠たいからだろうか。

「それでいいんじゃないんですか？ というか、なんで僕に確認を

取つたのか不明なんですが

「一応協力者だから、確認ぐらいしておいていいかな、と思つただけよ」

前を向いたまま喋る先輩は、歩を早めていった。

その後に続していく。足の長い藤原先輩の歩幅は大きく、ついていくのに疲れたが、なんとかついていく。やがて学校の門が見え、先輩の速度も落ちていった。

一人並んで学校敷地内に入つていくと、僕達と同じ生徒が多く歩いていた。今は投稿時刻だから仕方ないとと思うが、やはり女性と一緒に歩いているところを見られるのは恥ずかしいものだ、と感じる。それは僕にそんな経験が無いからなんだろうが。

歩いている途中、不可思議なことに気づく。

すれ違つていく生徒の半数ぐらいが、こちらを振り返つてくるのだ。どうしてだろうと思つてみると、原因は一つしかないことに気づく。

藤原玲璃という有名人と一緒に歩いていること、是しかあるまい。

「先輩、登校時はいつもこんなに注目されるんですか？」

「この時間に登校したこと無いからわからぬけど、校舎内じゃ割と注目をうけるわね。なんでかは知らないけど、私はそれなりに人の気を引きつけるらしいわ。まあ、中には私に憑いているものをつっすらと感じているタイプも、いるらしいんだけど」

つまり僕みたいなタイプか、と考えていると。

「楓君、今は話すのをやめておいたほうが良いわ。私が注目を集めているというのもあるかもしれないけど、なにより、藤原玲璃が誰かと一緒に歩いているという状態が、彼ら、あるいは彼女らには異常に感じることができて、気になつてしまふのだろうし」

注意を促され、僕は押し黙つた。

そこからは完全に会話を断ち、下駄箱まで歩いた。校舎の中に入つてから、僕と藤原先輩は放課後怪奇研究部の部室で会つことを決め、それぞれの教室に向かうため、別れた。

教室に行くまでの時間は、やけに長く感じられた。こそそと僕を見ながら話しをされたこともあつたし、眠い中授業を受けたくなかったというのもある。

だが、もつとも大きな原因は、わからなかつた。

なにか、とてつもなく大きな要因があるとわかっているのに、それが何なのかわからない。悩んで、授業中それが何なのか考えてみたりもしたのだが、やはり分からなかつた。

一限が終わり、休み時間になつた。友達からは今朝、何故藤原玲璃と一緒に歩いていたのかを訊かれたりしたが、たまたま道が同じだつただけだよ、と答えてやり過ごした。どうせ説明してもわからぬいのだから、と諦めていたのかもしれない。

同じ友人から聞いた話だが、僕の友達もあり、今回の事件に関わっている尾田は、今日も学校を休んだらしい。なんでも、家に引きこもつている状態なんだとか。学校に来ているなら事情や状況を訊こうかと思っていたが、それは無理なようだ。

当然、咲間貴美も学校にきていない。聴いた限りの話では、家にも帰つていらないらしく、行方不明という扱いらしい。捜索願も出されたらしいから、もしかしたら僕達が見つけるより先に、大人の手によつて発見されるかもしれない。

僕らより先に見つかつた場合、どんな事になるだろうか、と考える。もし三五年前の脱獄囚のように化け物とかしていたら、かなりの確率で恐れられ、虐げられるだろう。

そうなつた場合、僕は咲間貴美を助けて欲しい、という友人との約束を破ることになる。それは僕としても避けたいし、できるなら、化け物になつてしまつた女の子を助けたいとも思う。

ただ、思うのだ。本当にこのまま関わり続けて良いのかと。関わり続けた結果取り返しのつかない事態になつてしまふんじやないかと、危惧していたのだ。

そうやって心配している間に、時間は過ぎていつた。考えごとをしている間は眠気は来ず、だからこそ考え方続けていたわけだが。考

えれば考えるほど不安になつてくる。

もしかしたら、僕は藤原先輩を取り返しのつかない事態に巻き込もうとしているんぢやないかと、心の底から心配になつていたのだ。

## 突然変異 × 痘と突然変異

数学の授業をサボり、保健室で仮眠を取つたりしながら放課後までの時間を潰した僕は、先日とは打つて変わつた態度で部室棟を歩いていた。足取りは重くない。むしろ、普段よりも軽快な歩調で、歩を急ぎ進めている。

端的にその理由を述べれば、僕はさつさと帰つて寝たかったのだ。急いで第一のヒント『痘と突然変異』について調べ、三つ目のヒントについては後日調べると提案し、家に帰つて暖かい布団と柔らかい枕に包まれながら惰眠を貪りたいと思つていたのである。

本来なら、睡眠は極端に減らして、抱えている問題について対処するのが筋というものだろうが、それでも僕の活動にも限界がある。精神的にも肉体的にも、今現在も悲鳴をあげている状態なのだ。本当に、いつ倒れてもおかしくない。

さつさと調べて帰り、寝よう。心に決めて、怪奇研究部の部室がある二階を目指す。

放課後の部室棟にはそれなりに人がいたが、それぞれの活動に執心しているのか、僕が教室の前を通り過ぎても見向きをしたりはない。登校時のように、注目を集めたりはしない。先輩がいなければ僕なんてこの薄さなんだろうな、と思うと悲しくなつた。

まあ仕方がないか、僕と藤原先輩では知名度が違うんだし。

言い訳を作つていたら、気づけば怪奇研究部の部室前まできていた。

大して気遣いもなく戸を開ける。

「先輩、遅くなりました」

扉を開け、中にいるであろう先輩を捜そと教室を見る。中は相変わらず雑然としていた。ホコリっぽい部屋は、昨日から今日にかけて訪れた藤原家宅の倉庫を思い出す。

部屋の中央には、先輩がいた。

昨日ここを訪れた時のように、本を読んでいた。が、こちらを少しだけ見た後、やはりしおり等を挟まず、すぐに本を閉じてしまつた。どうやら、少しばかり待たせてしまつたらしい。

「遅かったわね。日直でも任されていたのかしら」

「掃除当番でした。すいません、待たせつけられたみたいで」

「別に良い。さ、早く行きましょうか」

言いながら、先輩は立ち上がる。僕は入り口から一步下がると、先輩は教室から出てきた。

二人そろつて、歩き始める。

「さて、先ずは鍵を借りないといけないわけだけど」

「そうくると思って、コンピュータールームの鍵を借りてきました」

「あら、手際がいいのね」

適度な会話をしながら校舎本館に行き、一階にあるコンピュータールームへ向かう。

「そういえば、櫻君つてパソコンは得意？ 私は苦手だから操作のほうはお願ひしたいんだけど」

「得意って程じゃないですが……普通の操作程度ならできますよ」

「なら大丈夫ね。私が操作すると簡単に壊れてしまつから、お願ひするわ」

「何がで叩くか使いすぎない限り壊れませんよ、普通は」

通路を通り、一階から二階へ階段を使って上る。途中すれ違った生徒には小言を喰かれるが、登校時にある程度慣れてしまつたからなのか、無視することができた。

十分とかからずしに、目的の場所へと到達する。

扉の前で鍵を取り出し、開錠して戸を開く。

コンピュータールームへと入った後、適当に選んだパソコンの前に座つた。先輩も隣の椅子に座つたところで、僕はパソコンの電源を入れた。

駆動音と共に画面が起動し、しばらくすると簡素な壁紙が表示された。ブラウザのアイコンをダブルクリックし、開かれた検索エン

ジンの入力欄にカーソルを合わせる。

「検索する言葉は何にしますか」

「癌、突然変異、でお願ひ」

言われた通りのキーワードを入力し、検索をクリックする。

二十万を超える検索結果があつたと画面に表示され、僕はその中にあつた一つのページを開いた。そのサイトには、癌と突然変異の関係について記載されていた。

「先輩、ありましたよ。癌と突然変異について書かれているページが。ええっと……有名な情報サイトみたいんですけど……えっと、全ての癌は遺伝子の突然変異によつて発生するつて書かれています」書かれている内容を部分部分わかりやすいように変えながら読み上げていく。

アボトーシス

「体を構成している数十兆の細胞は分裂と増殖と細胞死を繰り返している。通常は細胞の成長と分裂は制御されているが、特定の遺伝子に突然変異が生じると、このプロセスの秩序を乱してしまいうようになる。体が必要としていない場合でも細胞分裂を起こし、あるいは死滅すべき細胞が死滅しなくなる。このようにして生じた過剰な細胞を、腫瘍、または新生物といふ。この腫瘍とか新生物つていうのやつの悪性なのが癌、と説明されています」

言い終え、先輩のほうを見た。先輩は食い入るように画面を見ていた。何かを言うわけでもなく、ただ画面の先に何かを見るように、見入つっていた。思考の格好をして、ただひたすらに考えにふけつている。

「先輩、何か分かりましたか」

「あくまで予想、なんだけど」

一言前おきをした先輩は言つ。

「この突然変異つていうのが、もしかしたら今回咲間貴美が変化した原因に繋がっているんじゃないから。白が関連性のない話をしたとも思えないし。仮に繋がっていないとしても、ヒント三つ目『韓国の映画』に繋がるはず……楓君、突然変異、韓国、映画、の言

葉で調べて貰えないかしら。もしかしたら何か出るかもしねないし」

先輩の提案で、その三つのキーワードで調べてみると、いくつか

のページが候補に挙がった。

「これは……監督についてだから違う……これは……あつた！ 先輩、この映画じゃないですか？ 突然変異が関係あるみたいですね」

ど

ページを見せて、先輩に訊いてみた。

「…………それ知っているわ。確かに物語の内容は……」

先輩は、しばらく思考していた。が、やがてはつと思いついたよう

に顔を上げた。

「…………なるほど。そういうことね……だけどそんな事がありえるわけ……いや、わからないか……もしかしたら、といふことも……だとしたら、彼女の居場所は……」

ぶつぶつと、何か独り言を呴き始めてしまつ。そんな先輩の様子を窺つていると、何度も咳いた後、不意にこぢらを見て、何かに気づいたように発言をやめた。

「と、『めんさいね。考え方をしていると周りが見えなくなる』ことがあるの」

「いいですよ。で、何か思いつきましたか？」

「一応ね。ただ、確認を取らないといけないことができたわ。楓君、この後『尾田』って人の家に案内してほしいのだけど、いいかしら？」

「え？ 尾田の家ですか？ 構いませんけど、どうしてです？」

「ちょっと咲間貴美について知つておきたいことがあって。尾田つて子は咲間貴美の彼氏なんでしょう？ なら、彼女について何か知つてもおかしくはないか、と思つたの」

確かに、尾田は咲間貴美の彼氏である。

何度か自慢されたこともあるし、噂話も聞いたから、それは間違いないだろう。彼氏なら、彼女について何かを知つてもおかしくはない。

「わかりました。尾田はまだ引きこもつてゐるらしいんですが、案

内だけはします。ただ、無理に訊くのは止めて下さいね。そこは、尾田の友達として注意しておきます」

「友達思いなのね。そういうえば、私に依頼してきたのも友達から頼まれたからだつたかしらね。まあ、無理にはしないわ。ただ、ちょっと訊いておきたいことが一つあるだけだし」

椅子から立ち上がりながら、先輩は言つ。無理に問い合わせたりはしないと知り、少しだけ安心した。勿論、先輩がそんな無茶をするとは、最初から思つていなかつたが、それでも確定情報として知ることができたら、それだけで安堵できる。

「さ、いくわよ。時間が惜しいわ」

僕も立ち上がって、教室を出て行く先輩に続く。コンピュータールームから出て、鍵を閉め、僕達は歩き始めた。一階の事務室に鍵を返し、一階にある下駄箱に向かつ。

下駄箱で靴に履き替えた僕達は、尾田の家を目指すために学校を出た。校舎からでて校庭前を歩く最中、何度もちらちらと見られるが、今更気にする気も起きない。

「それにしても、あの映画ってどんな内容なんですか？ 僕知らないんですけど」

「後で教えてあげるわ。それよりも今は、尾田といつ少年の家に向かうことが先決ね」  
「あ、はい。尾田の家は割と近くにあるんですよ。ここから十五分ぐらいです」

学校を出た僕達は、尾田の家に向かつて歩き出した。尾田の家に行つたことは数回しかないが、道順は覚えている。迷うことはないだろう。

ただ、尾田は今も引きこもつているらしいから、僕達が会いに行つても会えない可能性もある。そうなつたら先輩の確かめたいことを確認する方法が無くなつてしまふんじやないかと、僕は少し不安だつた。先輩の考えを確かめることができなければ、今たどつている道に迷うこととなる。先輩の考えが正しいか分からぬ以上、進

展は期待できない。

先輩に頼り切りになるのもどうかと思うが、今の僕は大したことを考えていらない。一つ田のヒントと二つ田のヒント、やうひな三つ田のヒントの関連性も、よく分かっていない。

ただ、先輩はそれらがどのように関係しているかを、見抜いているようだった。

だから、今は先輩に任せよ。もしかしたら僕にできることがやつてくるかもしない、なんて期待を膨らませて、この間に、僕は尾田の家にたどり着いていた。

玄関から見える尾田の部屋。その窓は、何故か段ボールで覆われていた。

呼び鈴を押してから数十秒後、玄関から出てきた尾田の母親は、やつれた顔をしていた。

「あら、相馬君じゃない。えっと、そちらの方は？」

「学校の先輩の藤原玲璃さんです。今日は啓介に用があつてきました」

僕の声に合わせて、先輩は軽くお辞儀をする。

尾田の母親は、声の調子も普段と変わらず元気そうだったが、しかし目元の隈や、怠そうな顔付きに含まれた疲れまでは隠し切れていなかつた。

「啓介、学校を休んでいるみたいだつたから、様子を見に来たんですけど」

啓介、といふのは尾田の下の名前だ。普段は尾田、と名字で呼んでいるから、若干違和感を感じる。尾田の母親はあからさまに嫌そな、曇り顔をした。数分前、部屋の窓に取り付けられた段ボールを見て、その意図を把握している僕からすれば、当然の対応だつた。「その、啓介は……ね。ちょっと今、部屋に籠もっちゃつて。悪いんだけど、今日は会えないと思ひの。その、かなり落ち込んでたみたいだから」

それは知っています、とは流石に言えなかつた。

尾田の母親は、もう誰が見てもわかるぐらい、僕と藤原先輩の訪問を拒んでいたが、僕達もここで引くわけには行かなかつた。僕は、藤原先輩が何を確認したいのかを知らないが、しかし、少なくとも尾田のほうが咲間貴美について詳しく知つていていたはずだ。彼女について探るのなら、ここで尾田と対話し、いくつかの情報を聞き出

たほうが賢明だといえる。

ただ、僕としては友人に無理はさせたくない、とも思う。藤原先輩は強引に聞かないと約束してくれたが、最悪の場合、尾田と合わずに他の方法で調べませんか、と藤原先輩に提案しようと思つていた。無論、藤原先輩が簡単に納得してくれるとは、思つていなかつたが。

「ちょっとだけでもいいので、会えませんか？　すこし聞きたいことがあるんです」

「ごめんなさいね。あの子、今本当に酷い状態で……食事もあんまりとつてなくつて……」

尾田の母親は、本当に心配した口調で話した。どうやら、尾田の状態はかなり悪いらしい。自分の愛する恋人が突然化け物になつたら、そうなるのも当然か、と他人事のように考えてしまえるのは、僕がまだ実際に化け物とかした咲間貴美を見ていないからだろう。

「お願いします。あいつを助けるために、どうしても訊かなきゃならないことがあります」

何かを察知したのか、尾田の母親は神妙そうな顔付きをした。深く考へるようにな、しばらく思案していた。やがて何かを決意したのか、溜息をつく。

「啓介が部屋に籠もつている理由、知っているのね」「はい」

「そう。ちょっとまつててね、啓介に入れていいか訊いてみる」言つて、尾田の母親は家の中に戻つていた。

考えてみれば、あの人も咲間貴美が化け物になつたことを知つているはずなのだ。尾田が家に連れてきた恋人が突然部屋から消えて、窓ガラスが割れていって、尾田が混乱していたら、何かが起きたということぐらいはわかるだろう。

なら、この家に訪れることが自体やめておいたほうがよかつたのではないか、と今更ながらに思つたが、時はもう戻せない。今は前に進むことだけを考えよう。

僕と藤原先輩は、しばらく待った。

やがて、玄関から再び現れた尾田の母親は、すこし疲れたような面持ちで、かるく扉を開けて手招きをしてきた。

「合えるって。ただ、無理はさせないであげてね」

「どうやら、合つことはできるらしい。」

招かれるまま家中に入つていった僕と藤原先輩は、階段を上り、二階にある尾田啓介の部屋の前まで歩いた。扉を開けていいものかと迷つていると、藤原先輩が扉を軽くノックした。

「尾田君。三年の藤原玲璃だけど。……開けるわよ」

しばらく返答を待つた後、開けると忠告した先輩は、ドアノブに手をかけ、扉を開けた。

部屋の内部を見て、思わず息を飲んだ。室内はまるで巨大な動物が暴れ回ったかのように、酷い有様だった。壊れた机や棚、爪痕が残された壁が痛々しい。部屋の右奥のベッドに、毛布にくるまつて体を震わせている尾田がいた。

「尾田……」

意図せず、声が漏れてしまつほど、憔悴しきつた顔をしていた。

僕よりも先に部屋に踏み言つた先輩は、大して驚いている様子も無く、淡々と尾田に近づいていった。毛布を被つて怯えたようすでこちらを見ている尾田は、一言も喋らない。

「初めてまして、尾田君。三年の藤原玲璃、知っているわね？ 今日はあなたの恋人が化け物になつたことについて聞きにきたんだけど」化け物、という単語が放たれた瞬間、尾田の体が軽く跳ねた。

よほど恐怖を植え付けられたのか、あるいは反射的に反応しているのかはわからないが、どちらにしろ尾田の精神状態が悪いことに変わりはない。

「話せないなら頷くだけで良いわ。訊きたいのは一つだけ」

そんな様子の尾田を気にかけてはいるだろう藤原先輩は、それでも訊くことはやめなかつた。

流石に止めようかとも思ったが、僕としてもここで知ることがで

きない、という事態になることは避けたかったし、何より尾田を助けるためだ、と思って目を瞑つた。

もしかしたら、単に止めるのが怖かったからかもしれない。

「あなたの恋人は病気にかかっていた?」

先輩の発言に、尾田は頷く。

「それは、癌?」

尾田は一瞬だけ呆けた様な顔をして、すぐに頷いた。

「そう……質問はそれだけ。ありがとね、おかげであなたの恋人の謎に一步近づいたわ」

たった一つの質問を訊いて満足したのか、藤原先輩は直ぐさま歩き出した。すぐに行動するのはこの人の悪い癖だと思うが、正直なところ僕も早くこの惨状から退散したかったので、好都合だった。藤原先輩が部屋を出ようとするのに続いて、僕も部屋を出ようとす る。

出る間際、藤原先輩は足を止めた。

「尾田君、あなたの恋人のことなんだけど、私から一つ忠告してお くわ

尾田に視線を向けると、尾田は突然に言われたことに怯えたよ うな様子を見せた。

先輩はもう尾田など見ていなかつたが、これだけは言い残しておきたいと言わんばかりに、捨て台詞を吐こうとする。

「どんな結末が待っていても、あなたは恋人を助けて欲しいと願つた。なら、どんな形の恋人でも受け入れなければ駄目よ。たとえ化け物でも。それか 死体でも」

物騒なことを言い残し、藤原先輩は足早に部屋を出ていった。

出るタイミングを失い取り残された僕は、とりあえずフォローのために尾田のほうを向いた。尾田は何を言られたのかわからないとい う顔をしていたが、やがて真実みが出てきたのか、頭を押さえて 頸垂れる。

僕は、そんな友達を放つてはおけなかつた。

しかし、今の僕にできることは少ない。大丈夫だと断言できるわけでもなければ、咲間貴美は助かると決めつけられるわけでもない。だからせめて。

「尾田。僕は君のために全力を尽くすつもりだ。たぶん、あの人も。だから受け入れる準備だけはしておいてほしい。それが彼氏の勤めだと思うからね」

軽く元気づけるようにそういって、僕は尾田の部屋を出た。

尾田の母親にお礼を言い、尾田の家を出たところで藤原先輩が待っていた。先輩はやけに不機嫌そうな顔をしていたが、その理由は僕にはわからない。

「おまたせしました。さ、次にいきましょう」

「……ええ」

藤原先輩はやけに落ち込んだような様子で、心配だった。  
しばらく歩いたところで、不意に、藤原先輩が声を漏らした。

「ホント駄目ね、私って」

「……どういうことです？」

「あの場だったら、あんな事実っぽいこと言わず、もつと誤魔化せたのに。私たちが助けるから安心しろ、だとか、君が落ち込んでてどうするんだ、とか。でも、私は事実になりそうなことを言つてしまつた。彼のことを考え切れていたかったのよ」

落ち込んでいる理由はそれだったか。

「僕は大丈夫だと思いますけどね、あいつ、見かけによらず心は強いので」

「……ならないのだけどね」

僕はなんとか藤原先輩の落ち込みを無くせないと考えたが、せいぜいそんな言葉しかでない。藤原先輩は相変わらず落ち込んだ様子で、僕達は、淡々と夜になりかけの道を歩いた。どこに向かっているかはわからなかつたが、訊く氣にもなれなかつた。

黙りながら歩く最中、先輩が言った言葉を思い出す。化け物か、死体。もし咲間貴美がそのどちらかになるのだという意味なら、先

輩の頭の中にはどんな未来が予想されているのか、勿論、聞を出すことは怖くてできなかつたのだが。少し気になつた。

**突然変異** <8> 病氣（後書き）

今回は短めです。時間が無かつたからというのもありますが、ちょっと最近三人称の文章ばかり書いて他ので一人称が書き辛くなっているというのもあります。最後までと言わず、一部でも読んでくださつてありがとうございました。まだまだ続きますので、ご期待下さい。

## 突然変異 ▲9▼ 推測

藤原先輩と僕はどこかに向かつていた。

目指す場所はわからない。藤原先輩は無言で歩き続け、僕も黙つて付いていった。住宅街を抜け、中央街を通り過ぎ、気づけば僕達は、街外れにある御条という名の山付近まで來ていた。

「先輩、次の場所は御条山ですか？」

「ふもとに入り口があるのよ。本来は立ち入り禁止だけど、この町に住む中高生ぐらいいの女の子なら殆どが知っている、秘密の入り口がね」

「山」と言うよりも丘と言つたほうが適切な御条山を一度見上げた藤原先輩の表情は、硬かった。これから起ころる事態を予想して、緊張感を高めているのかも知れない。

御条山へ向けて歩き出し、話すタイミングを窺う。

「御条山なんかで何を調べるんです？ もう全部のヒントは調べましたけど」

「私の予想では、あの山から入れる場所に、咲間貴美がいるはずなの。三つ目のヒントである『韓国の映画』から予想する限りはね」「どうやら、これから咲間貴美本人と対面しにいくらしい。

化け物となつた少女と会いに行く。その事態を目前にして、緊張せざるを得なかつた。

「そうなんですか……あ、その韓国の映画なんですが、たしか『グエムル 漢江の怪物』でしたつけ。アレってどんな映画なんですか」

「簡単に言つと、韓国で漢江に突然変異によつて出来てしまつた怪物が現れて、主人公の娘が攫われる。下水道から助けを求める娘を救うため、主人公一家が奮闘するつていうお話。まあ、私も実際に見たわけじゃないから、具体的には覚えていないのだけど」

「へえ、そんな映画なんですか。でも、それが咲間貴美と、どう関

係があるんですか？」

藤原先輩は少しだけ表情を強張らせる。

「……あくまで推測なんだけど、咲間貴美の変化は、この突然変異にあるんじゃないかと思うの。科学的根拠も何も無いんだけど、そうとしか思えなくて」

「どういうことですか？」

「咲間貴美は癌だった。癌とは突然変異によつて起こる。つまりは咲間貴美は突然変異を起こしていいる状態ということになる。もちろんそれは単なる細胞増殖の異常だけど、もし、体細胞の遺伝子レベルで突然変異が起こつた、としたら」

まるでSF映画のような予想を、藤原先輩はしていた。

「つまり、咲間貴美は突然変異で化け物になつた、ということですか？」

「そういうことね」

さすがの僕も、そんな空想的な考えには同意しかねる。

「それは、ありえないんじゃないですか？」

「ありえないはないわよ。突然変異の中には人為的に起こすものもあるし、結果的に外面が変わる場合もある。私だつて過去にそんな例はないと思つていたけど、ヒント一つ目に出てきた『明治三五年の脱獄囚』が、その例なのではないかと思うわけ。その人も癌だつたし」

「でも、おかしいじゃないですか。そんな映画みたいなことが起こるなんて」

こればっかりは反論しなければならない。思つて僕は反攻したのだが。

「……槻君。ありえないなんてことはない。この世界には槻君も知らないことが沢山在るのだから、完璧な否定はできない。勿論私も出来ないし、先ほど言つたのはあくまで可能性。だから確定ではないのだけど、今はその推測しかできないのよ」

確かに否定は出来ないが、確定情報でもない予想を信じるなんて

「ことができるのだろうか。

半ば以上疑いつつ、しかしこれ以上に議論は無意味だと思い、溜息を吐く。

「はあ……わかりました。仮にその推測が正しかったとして、これからどうするんですか？　咲間貴美とあつたとして、彼女をどうやつて元に戻す気です？」

「これから咲間貴美が隠れていると思われる場所に行つて、咲間貴美を捕らえる。生きて捕まえられたら白に頼んで処理してもらい、無理だつたら仕留める」

藤原先輩は物騒なことを言い出した。

武器も持たない僕らが、どうやって化け物と化した咲間貴美を捕らえ、あるいは仕留めるのだろうか。疑問に思つ。

「どうやって、ですか」

「方法は実際に見ていればわかるわよ。あなたはなにもしないで、ただ立つてみているだけでいい。ただ、さつきが見えるあなたにとっては、ちょっとばかし残酷かもしれないけど」

言いながら、藤原先輩は歩を早めた。

慌てて付いていき、山道を登り続ける。

やがて、山のふもとまでたどり着いた。もつ自然ばかりが広がっている場所には、たつた一箇所だけ、人工的に作つたかと思われる空洞がある。

「あれが入り口ですか」

「そう。昔女の子の間ではやつたのよ。あの中を進んでいくて、一番奥にお札を置いてくれば願いが叶うつていう肝試しみたいなのが。その時に知つたんだけど、あの入り口つて下水道に繋がつてゐるらしいわ。下水道つて、化け物が隠れるにはちょうどいい場所じやない」

言つて、藤原先輩は下水道の入り口に足を踏み入れた。

恐る恐る付いていく。この先に化け物がいると思うと、足は竦んだが、いまさら前に進まないわけにはいかない。自分がもう取り返

しの付かない場所までてこむことに薄々気づきつつ、僕と先輩は暗がりの中を進み始めた。

突然変異 ▲10 化け物（前書き）

グロテスク表現あり

## 突然変異 《10》 化け物

御条山の麓にある入り口から内部に侵入した僕達は、本来立ち入り禁止となつてゐる下水道を進んだ。最初は広い空間ばかり続いたが、やがて狭い筒のような通路となる。

臭いは酷い。鼠や害虫が足下を這い、一歩踏み出す度に足音が響いた。暗がりの中を、携帯電話の電灯で照らしながら進む藤原先輩の後に、付いて行く。

「先輩はこの中に入つたことがありますか？」

「一度だけ。興味本位で中を調べて、結果的に街の地下まで続いていることがわかつた。中は途中から入り組んで、迷子になりそうだつた。でも、さつきからどう進んでいるか覚えているから、最悪引き返すことはできる」

「そうですか。でもし咲間貴美がいなかつたらどうするつもりですか？」

藤原先輩は少々迷つたように言葉を止め。

「……そうね。いなかつたらいなかつたで安心よ。ここにいなつてことはもう街からは遠く離れた場所に行つたつてことで、私たちの探索範囲を超えたことになる。そうすればもう見つけられないで、咲間貴美は癌だから、どうせ命も長くない。そうなれば、彼女を救えなかつた、という結論ができる、全部諦められる。でも」

立ち止まり、先輩は前方を指差した。

「気づかない？　さつきから私たちとは別の足音が聞こえる。この中には今、誰かがいるのよ。近所の悪ガキかもしれないけど、私は咲間貴美の可能性が高いと推測するわ。ほら、足を止めて耳を澄ましなさい」

僕も止まつて、音を拾おうとする。

僅かに水音がした。一粒一粒振る雨のような、あるいは水面を足で叩いたような音が、僕の耳にも届いたのだ。音は少しづつだがこ

ちらに近づいてきているようで、思わず体が強張った。

「ほら、不幸中の幸いにも彼女のほうから近づいてくれているみたいだし、先に進むわよ」

臆さず進む藤原先輩の後に、僕は小鴨のようになつに続いた。

一步、二歩と歩みを進め、何度もかの曲がり角を曲がった時、藤原先輩は足を止めた。前方に携帯電話を向け、電灯によつて照らし出す。

足音が迫つてくる。もう耳を澄ます必要も無いほどに大きくなつた音は、やがて速くなつていった。水たまりの上を駆け抜けるように、ばしゃばしゃという水音を鳴らしながら、僕たちに近づいてくる。

息を呑んで待ち構えていると、視界に何かが映つた。

人だ。灯りに照らされた、全身と着用している高校の制服を濡らしている女学生の姿が、目に入った。髪は短めで、天然なのか癖が強い。瞳は大きく、体は小柄。一見すると中学生ぐらいにも見えるその女学生には、心当たりがあった。

僕と同じ学校の一年に在籍している生徒。

咲間貴美だ。

「あれ、啓介くんの友達さんじやないですか」

疲労した様子の咲間貴美は、僕達を見つけるなり、そもそも当然の様に話しかけてきた。

その言動や容姿からすれば、ちょっと雨に降られた女学生にしか見えない。体が異様に筋肉質というわけでも、腕が化け物のようになつてているというわけでもない。

ただ、どういうわけか、制服は右腕の肩から先が無くなつており、そこら中に穴が空いていた。若干色が変わつてているのは下水のせいだろうか。髪も普段以上に巻いており、少々みすぼらしい格好となつていて。足のソックスが赤くなつていているのがやけに目立つた。

「どうしてこんな所にいるんですか？ そちらの方は、藤原玲璃さん、ですよね？」

まるで誤魔化すかのようになんと自然と喋ろうとする咲間貴美。

狼狽えていると、先輩が僕の前に手をかざした。

これ以上踏み出すな、と指示するような動き。

「知つて貰えているとは光榮ね、咲間貴美さん。私たちがここに来たということは、どういうことだが、あなたはわかっているわね？」  
「えつと……ああ、啓介くんが頼んだんですね。私を捜してくれつて。いえ、助けてくれだつたかもしれませんね。でも、といつことは、私がどんな状態か知つていてるんですよね？」

藤原先輩は頷く。

咲間貴美は俯いた。彼女の突然変異や癌という状態について知られているということは、それなりにショックだつたのかも知れない。病気を知られるというもの、人と違う部分を知られるというのも、それなりの心労をともなう。

僕が悠長にもそんなことを考えていると。

「……そうですか、じゃあ私が化け物だつて知つていてるんですね」

咲間貴美は笑つた。

口が裂けそうな笑み。

「それじゃあ 誰かに言い広められる前に口封じしないといけませんね」

嬉しそうに。

咲間貴美は右腕を突き出した。

「あははは、本当はあんな醜い姿晒すの、嫌なんですけど」

まだ幼さを感じさせる柔肌が、変化を始める。皮膚がどす黒く変色し、筋肉が盛り上がり、指ががちがちと間接を鳴らす。親指と小指と手の平が繋がり、三本になつた指が徐々に大きく膨らみ始め、やがて、足首のように太くなつた。

記憶している限り、竜の腕があんな形だつたはず。なんて考へている僕の思考は、どうやらおかしいらしい。腕が変質して化け物の腕になるという非現実的な光景を見せられて、冷静に分析してしまつていて。人は極限に追い込まれると冷静さを取り戻すと訊いたこ

どがあるが、どうやら本当らしい。

巨大な三本の指と、巨漢よりも太い豪腕を、咲間貴美は動かし始める。感触を確かめるように指を動作させ、腕を軽く上下させていた。

「はあ……ようやく終わった。これ嫌なんですよ、痛いし、苦しいし、醜いし。でも、もう慣れちゃいましたけどね。流石に頭おかしくなるほど使ってたら、慣れもするつてもんです」

一人で話しう出す咲間貴美の目は、僕達ではないなにかを見ている。表情は、一言で言うならいかれていの状態。顔は歪み、頬は引きつり、額には青筋。薬物よりも危険なもの投与されたかのように、咲間貴美は引き攣つたようにははと笑う。

恐い。恐いという言葉が頭に浮かぶ。

足が震え始めた。これから何をされるかを想像すると、もう、冷静な判断などできなくなりそうになる。

「それがあなたの、化け物の腕ね。で、それで今まで何人ぐらい狩つてきたのかしら。少なくとも、あたりまえのようだ」口封じと言つちやう程度には、やつているはずだけど

怯えた様子を見せない藤原先輩は、当然のように咲間貴美に話しかける。

「ああ、服が濡れているのは単に下水に落ちちゃつたからですよ？まあ、殺してはいませんよ、殺しては。ちょっと興味本位で叩いて、血まみれにさせちゃつたぐらいです。あの瞬間はホントに私、人じゃなくなつたって思いました。でも、とある人から教えてもらつたんですよ。私にはもう、誰かを殺していく人生しか無いんだつて。でも、そんな殺していく人生にも、価値はあるんだって」

「価値なんて無いわよ。人を殺すつていうのは大罪。絶対的に裁かれなければならない罪だわ。そりゃあ殺しいかなければならない人というのもいるけれど、あなたはまだ違うはずよ」

説得しようとしている先輩に対し、咲間貴美は、ほんの僅かに理性を取り戻したのか、自らの醜い右腕を見ながら、溜息を吐いた。

まるで自分に嫌悪を抱くような視線を自らの腕に向け、再びこちらを見る。

「先輩たちにはわからないと思いますよ、私の気持ち。ある日突然腕がこんなになつて、大好きな人から化け物つて言われたときの辛さなんて。本当に悲しくて、苦しかつた。大切な人に必要とされなくなるつて、頭おかしくなるほどに辛いんですよ。でも、そんな私も生きる意味があつたんですよ。誰かに必要とされたんですよ」

豪腕を握りしめながら、咲間貴美は高校生らしいかわいげのある笑みを浮かべ。

すぐさま絶望感に満ちた歪んだ笑顔となつた。

「私を欲してくれた人のためにも、ここで捕まるわけにはいきません。あの人のこと調べられるのも嫌ですし、私も捕まえられて処分されるのは嫌ですし、ね！」

言いながら、咲間貴美は壁面に右腕を撃ち込んだ。

コンクリートを高所から落としたような音が響く。咲間貴美は瓦礫を三本の指で掴み、野球の投球フォームのように腕を振りかぶり、こちらに向けて投げた。

直径四〇センチはあるつかといつ石の塊が迫る。

「ヒイ！」

情けない声を上げながら、身を屈めた。

僕の前にいた藤原先輩のことを庇う余裕なんて無い。

自分の身を守る防衛反応で手一杯だった。

目を閉じようとした時、藤原先輩の背中と横顔が視線に入つた。

背後には、うつすらとした靈体が浮かんでいる。確か名前はさつきだつたか。思い出しながら見ていると、藤原先輩は避けようともせず口を動かし始めた。

「さつき、動き出せ。あの瓦礫と叩き落とすから始めましょう。ふわりふわりと浮遊する靈体は、先輩の発言と共に動き出した。

盾のように先輩の前へ回り込み、腕と思われる部位を上に振り上げる。

迫る瓦礫に合わせ、腕を振り下ろした。靈体が何をやろうと無意味だということぐらい知っている僕は、何をしているのかよくわからなかつたのだが。

瓦礫に靈体が当たる直後、腕が変化した。

ほんの一時だけ、赤みを帯びたのだ。元の色は白だつたが、触れる瞬間だけ赤に染まつた。色の変化に何の意味があるかを探る前に、轟音が鳴る。

横方向に移動してきた瓦礫が、下に叩き落とされた。

本来物体に触れることができないはずの靈体が、瓦礫を落としたと察する。そんなことが可能なわけなかつたが、しかし実際に瓦礫は落とされた。どういうことかわからず、おそらく呆けたような顔になつてゐるまで、藤原先輩を見る。

「せ、先輩。さつきのあれはなんですか」

思わず訊ねると、藤原先輩は当然のように言つた。

「なにして、さつきよ。靈体のさつきに実体を持たせて、叩き落としたの」

「！ 精にそんなことできるんですか？」

「さつきは靈じやないわよ。靈つて言つより鬼ね。言つてなかつたかしら。彼女の名前の由来は殺しの鬼。合わせて当て字で『殺鬼』さつきつていうのよ」

女性名詞だとばかり思つていた僕は、驚いた。

鬼、ときたか。鬼なんてものは見たことがなかつたが、確かに靈とは微妙に違つてゐるとは思つていた。しかし、鬼。鬼なんてものが実在してゐるなんて。本当に驚くばかりだ。

僕が間抜けにも考へていると、水音が鳴つた。慌てて視線を変えると、咲間貴美がこちらに近づいてきていた。走り寄る咲間貴美を見ながら、藤原先輩は指示を出すように言つ。

「殺鬼、迫つてくる女の子の右腕を肩から切断」

靈体の殺鬼が動いた。

腕のような部位を振り上げ、振り下ろす。それと共に、天井と地

面に亀裂が走った、いや、ひびが入ったのではなく切り裂かれているのだ。見えないなにかが、壁を削りながら咲間貴美へと向かっている。

すぱんと、ギロチンで首を切断したような音がした。

するりと、咲間貴美の右腕がずれ、落ちる。

「あ……あああああああああああああああああああああああああああああ！」

数瞬遅れて大量出血と絶叫。

鼓膜が破れそうな叫び声が響き、咲間貴美は地に伏した。

倒れながら、咲間貴美は空いた左手をこちらに伸ばす。まっすぐ伸ばしたのではなく、文字通り伸ばしてきたのだ。少年漫画の主人公のごとく伸ばされた腕が、一直線に進んでくる。

「殺鬼、迫つてくる咲間貴美の左腕を破碎しなさい」

冷静な指示と共に、靈体は無造作に右手を咲間貴美と同じように伸ばした。直線上に進んでいった腕同士が空中で衝突し、直後小爆発が起きる。おびただしい量の血液が飛び散り、振動が伝わってきました。僕や藤原先輩に血は降りかかるなかつたが、下水道内は生臭い臭いで満たされた。胃から何かがこみ上げてきて、思わず僕は吐いてしまう。

体を襲う倦怠感にさいなまれながら、咲間貴美を見ると、咲間貴美は立ち上がっていた。気づけば、腕も元に戻っている。

「なるほど、消された部分も細胞を増やして瞬時に回復できるわけね。厄介だわ。やつぱりここで殺しておかないと。殺鬼、咲間貴美を細胞一つ残らないほど刻みなさい」

冷酷な指示が放たれ、殺鬼が動き始めた。

藤原先輩の背から離れ、咲間貴美に近づき、両腕を実体化した。

刃物のように鋭くなっている爪を振りかざし、咲間貴美の体を切り裂いた。急接近した殺鬼を見るはずもない咲間貴美は防ごうとせず、何をされたのかもわかつていいない様子で、切り裂かれる。

しかし、直ぐさま傷は再生。殺鬼は止めることなく攻撃を続ける。

斬撃と復活が繰り返され、僕は何度も吐き気を催した。女子高生が一方的に虐殺されるなんて光景は、人が見るべきものじゃない。しかも、肉体が復活していくならなおさらだ。永遠に終わらない苦痛を味わっているはずの咲間貴美を、僕は直視できなくなっていた。もうどれぐらい続いたどうか。僕の意識ももううつとし始める中、不意に先輩のひざが落ちた。右腕で両目を押さえて、僅かに呻いている。

頬を、血が伝っていた。

呼応してか、殺鬼が攻撃を止める。服が切り裂かれすでに全裸とも言える状態になっていた咲間貴美は、攻撃が止んだと同時に体を完全に再生させ、直ぐさま動きだした。痛みを堪えるような苦しみに満ちている顔のまま、僕らがいる方向とは逆に向け、走り出す。僕と藤原先輩が残された。

戦闘が終わったのだ。

「……先輩、大丈夫ですか？」

吐き気に苦しめられながらも、未だに口を押さえ続ける藤原先輩を気にして、駆け寄った。手をどかすと、先輩の両目からは血が溢れていた。

赤い涙のように、流れ出ている。

「先輩、それは……」

「……ごめん、なさい。ちょっと、無理をしたわ……しばらく動けないかもしねない」

いつになく弱気な口調で話す藤原先輩を心配しつつ、僕は下水道の先を見た。咲間貴美が引き返してくる様子は無いが、ここにいるのは危険だ。一刻も早くここから出ないと行けない。「先輩……今はここから出ましょ。肩を貸しますから立つて下さい」

「……ええ」

力なく頷く藤原先輩を連れて、僕らは来た道を引き返し始めた。

## 突然変異 『10』 化け物（後書き）

戦闘は入れるきなかつたんですが、流れで戦闘に。もっと推理とか搜索とか探索に力を入れたいと思いつつ、バトルのほうが楽だとも思つてしまっています。最後まで見ていただかたもそうでないかたありがとうございました。書く時間が限られているためなかなか続きを出せない状況ですが、次話を期待して下さると嬉しいです。

「玲瓈の目はね、ちょっとどうじやないほど特別なんだよ」

下水から廃ビルまで逃げ帰った僕と藤原先輩を見た轟木という名の青年は、少しばかり面倒くさそうに金庫で簡易ベッドを作り、そこに藤原先輩を寝かせ、目に呪文みたいな文字が刻まれた包帯を巻き付けて、説明を始めた。

「玲瓈の目は鬼との、つまり殺鬼との通信機みたいなもんなんだ」「通信機?」

「そう。玲瓈が昔、大きな事故で視力を失った際に、鬼と契約してその目を譲り受けたんだ。玲瓈はその目で見たものを鬼に伝え、言葉を使うことで、鬼に指示を出せる」

先ほど、咲間貴美との争い中に指示を出していたのはそのためか。「ただ、使う度に、つまり命令する度に、玲瓈の目は酷使される。目自体は特別でも、周囲の筋組織までは特別じゃないから、先にそつちが破損を始める。結果、目に負傷を負うこととなり、使いすぎるとまた視力を失うことになる」

寝たまま動かなくなつた先輩を見つつ、轟木白は部屋の中を歩いて、いくつかの金庫を開いた。金庫の中には膨大な量の紙束が入つており、轟木はそれに目を通し始める。

「さて、とりあえず現状はわかつた。御条山から入れる下水道に咲間貴美がいて、戦闘になつたと言うわけだね。なんで日本のこんな地方に人が入れる下水管があつたのかはわからないけど、今はどうでもいいかな。さて、これからについて話そつか」

資料を金庫の上に置いて、部屋の中央にいる僕と距離を詰めてきた轟木は、僕の隣で寝ている藤原先輩を再び見た。

「あんなヒントで興味を引いちやつて悪かつたと思つてゐるし、今回件は僕が対応しよう。君たちはここに残つて、玲瓈が回復し次第別の場所に移つてもうづ。おそらく数日中には咲間貴美を処分で

きると思うから、それまで安全なところに隠れてもらつよ

「！ 処分つてどうということですか？」

轟木は悪びれもせず。

「どういうことって、考えればわかるでしょ？ 人を襲う化け物がいる。襲われた人間がいる。だったら退治しなければならない。退治するということは殺すということだ」

殺すのか。

焦燥を感じた。尾田の願いを叶えてあげたい僕としては、殺処分という結末はもつとも回避しなければならない。できるなら、生きて捕らえて、元の生活に戻してあげたい。

ただ、殺し以外に道が無いようにも思える。咲間貴美の口振りから察するに、彼女はもう正常な精神を持つていない。すでに人へ手を出したようだし、自ら『慣れた』とも言っている。もう、救いようなどないのではないかと、考えてしまう。

反論はあつたが、できなかつた。所詮そんなものは僕の感情論なんだと、知っていたからだ。

「それじゃあ槐君。僕はちょっと出かけてくるよ。周りには結界つていう防御壁みたいな張つておくから、突破されない限りは大丈夫のはず。君たちはとりあえず待機していて欲しい」

「……」

「……あのさ、君が咲間貴美を生きたまま元の生活に返したい気持ちもわかるけど、それは無理だ。聞いた限り彼女はすでに化け物を受け入れている。それに、突然変異を操つていても、癌であることに変わりはない。どっちにしろ寿命は少ないはずだよ。ま、癌細胞を完全に取り除けばまだわからないけれど、もう取り除ける量じゃなくなつていいと思うし」

冷徹に言いながら、轟木は歩き出した。

「それじゃあね。玲瓈が起きたら、僕から話したこと伝えといて」  
言つて、轟木は部屋から出て、階段を下りていった。

金庫しかない殺風景な部屋には、僕と藤原先輩だけ残された。一

度視線を藤原先輩に向けて、様子を窺つてから近くの金庫に座る。

しばらくの沈黙。

「槻、君」

長く続くかと思われた静寂は、わずか五分で打ち消された。

藤原先輩が目覚めたことによつて。

「先輩、大丈夫ですか？」

「うん、なんとか。まだ目が痛いけど、離せる程度には大丈夫よ」  
無事だとは言いながらも、先輩の息は荒い。痛みを堪えているのか、疲れたからなのかはわからないが、どちらにしろ体調は良さそうではなかつた。

右手で両の目を押さえながら、先輩は起き上がる。

「白はいるの？」

「さつき出て行きました。咲間貴美を捕らえにいくのだとか。ここには結界を張つたから大丈夫らしいです」

あえて、僕は轟木が咲間貴美を殺しに行つたと言わなかつた。

「そう、それは不味いわね」

「え？ なにがですか？」

誤魔化そうとすると、先輩は予想外なことを言い始めた。

「私たちが、非常に不味い状態にあるつてこと」

「どういうことです？」

「結界つて言うのは、清浄の領域と不浄の領域に分けて、清浄なほうへ災厄をいれないようにするんだけど、ここは見ての通り不浄そのものじゃない。つまり効力は薄い。それに、咲間貴美はそもそも災厄ではなく、人間でもあり化け物でもあるつて部類、つまり未分類にあたる。分類できない以上災厄にはならないから、結果的に結界の意味は無い」

つまり、結界なんてものの効果は無いということか。

ということは、僕らは安全でもなんでもないということになる。

「つまり、咲間貴美がここに来たら、もう僕たちには防ぐ手段がないと？」

「そう。それに加えて、咲間貴美は異常な嗅覚をもつていると推測できる。楓君は見ていなかつただろうけど、咲間貴美は鼻も変化させてた。犬みたいなのにね。鼻が犬のようになつたとしたら、嗅覚だつて犬のようになつていてもおかしくはない。私たちの微かな臭いを、正確に言えば下水道でつけられた悪臭を追つてきたら、ここまでたどり着くつてわけ」

「それって、危険つてことじやないですか」

藤原先輩はそうね、と呟いた。

どうやら、僕たちはどうしようもないぐらいに危ない状況にあるらしい。藤原先輩が動けない今、奇襲されたらあっけなく倒され、いや、殺されてしまうだろう。

咲間貴美は殺しはしていないと言つたが、これからも殺さないとは言つていらない。咲間貴美を化け物だと知り、実際に見てしまった僕達を殺しにきても、おかしくはない。

「ただ、この状況にも唯一の救いがあるわ」

「……なんですか？　この絶望的な状況の中で、救いつて

「あなたの目よ」

藤原先輩は包帯を巻いたままの顔で、僕のほうを向いた。位置などわかるはずもないのに、なぜか、僕のいる方角へ顔を向けたのだ。「あなたの目は靈視だつたわね。それはつまり、靈を見るつてだけの目じやなくて、本当の意味の靈視つてことでしょう？」

なんと返答していいか迷つた。

たしかに、僕の靈視は靈が見えるだけではない。ただ、それを明かすのは僕と藤原先輩の人間関係を完膚無きまでに破壊する恐れがあつた。

答えようか、答えまいか。答えないほうが藤原先輩との関係を維持できること知りつつ、僕は頷いた。もしかしたら、今まで隠していた部分を、彼女には話していいと思えたからかも知れない。

「……そう、ならまだ望みはある。あなたの靈視を使って、咲間貴美の弱点を探すわ」

「どうやってですか？」

「あなたは見ればいいのよ。咲間貴美の、どうに癌があるのかを。直接的には見れないけど、人の内面がわかるその田になら、彼女の急所も当たられるでしょう？」

動搖しながら、僕は頷く。

「は、はい。確かに靈視を使えば、相手の弱点を探せるかも知れません」

「なら、探してみて。後は私に任せてくれればいい。幸いにも手足は動くのだし、殺鬼も健在。ならば、なんとかなるわ」

少しばかり自信過剰とも思える藤原先輩の言葉は、どうしてか、僕に勇気を与えてくれた。

その後、僕は金庫をすべて端に避け、戦うための場を作った。藤原先輩はずつと壁にもたれかかっていたが、僕が金庫をすべて動かすと、立ち上がって準備運動を始めた。

指示を出すだけなのに運動が必要なのだろうか。いや、そもそも田を包帯で封じられたまま指示が出せるのだろうか。

心配していると、藤原先輩は何かを察してか、表情を硬くした。体を強張らせ、辺りを窺うと、奇妙な音が聞こえた。まるでコンクリートを重機で壊しているかのようなその音は近づいてきて、やがて間近で破裂するようになった。

下から突き上げられるように、床が打ち砕かれた。穴を穿ち、瓦礫にまみれて、咲間貴美が姿を現した。

## 突然変異 〈12〉 化け物と鬼と靈視

咲間貴美は、端的に言えば人間の姿をしていなかつた。

胴体は人型をしていたが、首から上は髪の毛以外狼の頭部、両手は例の化け物の腕。両足はダチョウのようで、一見すると元が人だつたことすらわからない。生物学上で言つならキメラとしか分類できないだろう。

人ではなく。

もはや化け物というレベルでもない。

「ああ、やつぱりここにいましたか」

すでに完璧な人外と化した咲間貴美は、碎いた床から、まだからうじて平面を保っているコンクリートに着地し、直ぐさま肉体を変異させた。全身の肉という肉を収縮させ、元の人間の姿へ戻る。

変異後の姿だけみれば、可愛い女の子でしかない。

ただ、すでに瞳孔が開いている眼は、とても年頃の女性のものとは思えない。こちらを見る目は異常の域を遙かに超え、もはや超常と言つても過言ではない。

視線だけで殺されそうだ。

「まったく、大変だつたんですよ？　ここまで隠れながら来るの」首を鳴らしながら、咲間貴美は愚痴を零した。

まだ理性はあるようだが、いつ襲つてくるかはわからない。なにしろ、彼女はそのために僕達追つてきたのだから。当然、ここで仕留めるつもりなのだろう。

「さて、さつさと終わらせますよ。もつすぐ人も来るだらうし」

咲間貴美は、歩き出した。

一歩ずつこちらに近づいてくる。視線を外しては行けないと思いつつ、それでも藤原先輩を見た。頭部に包帯を巻き付けた先輩は、気づいているはずのなのに、焦った様子も無い。

「櫻君。これから咲間貴美を極力捕らえるように倒すわ。ただ、覚

悟しておいて欲しいのだけど、今回ばかりはあなたに重荷を背負わせることになる。……あなたが人の中を見るのは嫌だと、私は予想しているけれども、それでも、私一人では彼女を助けられないから、だから」「

「……わかっています。確かに、僕は彼女の中身を見たくないです。人の内面を覗くなんて、本当に最低の行為ですし。ただ、それで彼女が助かるなら、僕は最低の人間になり下がります」

返事をし、再び咲間貴美を見る。

すでに、彼女の腕は化け物のそれと貸しており、こちらに向けて走り出す準備までしていた。右手を後方に引き、両足に力を込め始めている。

「楓君。殺鬼を使えるのは三回程度。それまでには、頼んだわよ」言つて、藤原先輩は封印を解くように包帯を取つた。

露わになつた両の目は、赤く充血していた。目の周囲は血管が浮き出て、面妖な顔付きとつている。心配しつつ、再度前を向く。咲間貴美が、地面を蹴つた。

こちらへ向け跳躍。

たつた一度地面を蹴り、一直線にこちらへ向かつてきた。わずかに弧を描きながら進んでくる。横目で先輩を見ると、すでに口を動かし始めていた。

「殺鬼、咲間貴美を弾いて」

先輩の背後にいた靈体が、動き出した。

赤く染まりながら、咲間貴美に全身をぶつけた。

何かが強打された音。

弾き飛ばされる咲間貴美。

壁面に激突し、埃が巻き上がつた。視界がふさがれたが、すぐに晴れる。

瓦礫に埋もれた咲間貴美を、僕は直ぐさま直視した。

靈視という、人の内面まで見ることの出来る目で、咲間貴美を見る。

目に意識を集中していく。眼球が張り裂けるほど）の痛みを伴つたが、その鈍痛と引き替えに、咲間貴美の内部を見ることが出来た。見えたのは、文字。

部位で言ひなら、ちょうど心臓の辺りだらうか。そこから体中を巡るよう）に文字の羅列が溢れ出ている。文字列を読み起こせば、それが咲間貴美の思考だとわかる。

靈視によって、僕は咲間貴美の心を見ていた。

それが靈視の力。

靈視とは靈を見るためだけの目じやない。

ときには過去や人の心まで読み切る。

これを使い、咲間貴美の弱点を探すというのが、藤原先輩の作戦だった。

癌が原因で突然変異が起きているのなら、その中心には腫瘍がある。咲間貴美の内心からその腫瘍の位置を判断し、取り除けば、あるいは、という作戦だった。

無論、そんな作戦が成功する確率は万に一つもないだらう。腫瘍の削除によって突然変異が止まるなんていうのは僕たちが勝手に抱いた想像で、事実とは限らない。

だが、もし。

一億分の一でも確率があるのなら。

それにかけてみよう、と言うのが藤原先輩の結論だった。

「槻君、早く！」

叱咤され、再度意識を集中する。

咲間君の意識の中は、悲鳴にまみれていた。

辛い、痛い、悲しい、苦しい、吐きたい、怖い、泣きたい。

嫌だ、嫌だ、嫌だ。

嫌、嫌、嫌、嫌。

負の感情しか無いと思われるほど混沌とした思考の中には、殺害衝動と思われる感情は、ほとんど無かった。仕方ないから殺す、バラしたら困るから殺すといった、間接的に殺害を求める感情はあつた

が、心底殺しを欲してはいないよつだ。

探っていく中、特定の部位を指して『痛い』と考えている」ことが

わかつた。

その部位に付けるため、わらじの集中を強めている。

不意に咲霞貴美が動いた

見なしてし

ちてゐる。

「見ないで、見ないで、見ないで！！」

咲間貴美が右手を伸ばす。

きた。

避ける間もなく直撃。

衝擊、激痛、吐血。

意譲が途切れた。体が吹き飛んだと云ふで

「が  
ぐ  
ぐ  
」

一瞬何が起きたのか判断しかねたが、すぐに思い出した。

慌てて前方を見ると、咲間貴美が両膝を地につけていた。

前に伸ばしたまま、硬直している。直前の彼女の台詞を思い出して、

「お前は、元々でない義の靈現は、必ずかかる。覗いていたい田のへる。」

から、極度の不快感を伴う。咲間貴美は覗かれたことが嫌で、見な

いで、などと書いたのだね。

おぼしきな意識の中、咲間貴美の表情が歪んでしぐ光景を見た。

敵が迫ってきているというのに、体は動かなかつた

まっすぐ伸ばされた腕は文字通り伸び、僕を殺すために進んでくる。

終わりを予感したが、まだ僕には手があった。

「先輩！」

自分の擦れ声に驚いたが、それでも何とか言葉にならなかった。前方に藤原先輩のものと思われる足が見えた。

「殺鬼！」

指示すら出さなかつたが、靈体の殺鬼は直ぐさま真っ赤に染まって、先輩の前方に回り込んだ。進んでくる巨大な化け物の手を腕のようないで掴み、止めようとすると。

重厚な音。

一瞬、殺鬼が消し飛ばされたとも思ったのだが、僅かに霧散しただけで、完全に消滅してはいなかつた。先輩の足も無事に立つているし、どうやら防げたようだ。

「櫻君、癌がある部位はどう？」

「左の肺の下……です」

それだけ聞くと、先輩は短く口にした。

「殺鬼、左肺の下を撃ち抜け。殺さない程度に」

殺鬼の頭部が変化を始める。

角と思われる部位が前方に向けられ、一直線に伸びた。

ほぼ一瞬で咲間貴美まで到達した角は、咲間貴美の左肺の下部分を貫いた。

咲間貴美の体から力が抜け、角が靈体に戻ると同時に、がくんと地に落ちた。

## 突然変異 〈12〉 化け物と鬼と靈視（後書き）

一日遅れましたすいません。

焦つて書いたためか、元々おかしいのかはわかりませんが、文体とか構成とかめちゃくちゃです。お目汚し失礼しました。

近々、これ含めた一章全体の全文改稿を行いたいと思うので、しばしあ待ち下さい。もうすこしはまともな文章を書いてきます。

## 突然変異 〈13〉 後日談

「さて、君は今日、ここに事情説明のため来てもらったわけだけど、咲間貴美との一件以来連絡を取つていなかつた藤原先輩に呼び出され、例の廃墟に向かつた僕を待つていたのは、轟木白といいうさんくさい男性だった。

事件後、彼の咲間貴美の身柄確保と治療、それに加えて事後処理をすべて行つてくれたらしいこの男との対談は、未だに嫌なのだけど、しかし断ることもできないだろう。

「端的に言つと、咲間貴美は助かつたよ」

「まらなそうに、轟木は告げ始めた。

「一応知り合いの医者に見せて、体の癌を一通り取つて、その上で体の補強をしてもらつた。違和感は残るだろうけど、とりあえずは生き残れたみたい。ただ、精神的にはどうしようもないけどね。一生トラウマになるだろうし、恥にもなるだろ?」

確かに、咲間貴美はあの一件を生涯背負わなければならぬ。

だから、助けて良かつたのか、と考えることが、多々あつた。

もし、僕たちが彼女を助けていなければ、どんな結末が待つていたのだろうか、などと考える。心を覗いた僕は知つているが、咲間貴美は助かりたい、とは考えていいなかつた。いや、むしろ終わらせたいと考えていた。当の本人は、最初から助かる気なんてなかつたわけだ。

そういうふた事實を知つてしまつと、僕たちがした一方的な自分勝手が正しかつた、とは言えなくなる。いや、元々何が正しいかなどないのだから、こんな思考自体が不毛なのだけど。

僕たちの行いは間違いだつたのだろうか。

よくわからない。

「ま、僕らにはもう関係ないけどね。あの尾田つて少年も、背負うと決めているんだろう? だったら部外者の僕らに口出しする権利

は無いね。本音を言えば、大して興味もないのだけど」

言つて、轟木は金庫で作った寝床に横たわった。

「あ、そうそう。玲瓈の目は戻ったみたい。元々目自体が特殊だから、周囲を直そうとしたのかな。良かつた楓君、多少は歪んでいるけども、これで元通りだ。僕と君は最初から普通だし、玲瓈は元に戻れる。咲間貴美と尾田啓介の関係もある程度までは戻るしね」

「確かに、尾田は化け物の恋人つていう役目を背負うと決めてますが、本当に元通りになるんでしょうかね。僕は、とてもそろは思えません」

僕の話を興味なさそうに聞いていた轟木は、天井を見る。

「癌つてのは、再発するからね。それと同じで、化け物になるのも、この場合は突然変異とでも言えばいいのかな、また起ころるかもしれない。でもね、少なくとも尾田も君も玲瓈も咲間貴美も僕も、今回と同じようにはならないよ。玲瓈は今度こんなことがあつたら咲間貴美を殺すし、咲間貴美は耐えきれず自害を選ぶだろう。尾田つて子は最後まで庇うかも知れぬけど、僕や君はたぶん適度に関わつて、それでいて適度に傍観者を貫くはずだ」

「僕とあなたを同列に扱わないでください」

「手厳しいね。まあ、当然と言つちゃ 当然か。ところでさ」

もう説明など終えたはずの轟木は、まだ話すことがあると言わんばかりに会話を続けようとしてくる。僕としてはこんな廃墟からはとつと退散したいのだが。

「なんですか。手短にお願いします」

「玲瓈の背後にある殺鬼についてなんだけど、知りたい？」

思考が確かに揺れた、と僕は感じ取る。

ずっと考えていたことだ。藤原先輩の背後にあるのはなんなのか。実体化できる靈体、いや、鬼だったか。確かに鬼を地靈や祖靈だと考える人もいるが、実際にそうなのか僕はわからない。そもそも鬼の靈なんて、僕は見たことが無いのだ。その上実体も持ち合わせていないなんていう話は、空想上の物語でしか聞いたことがない。

知りたい、とは思つ。

ただ、この男から聞いていいものか、とも思つていた。聞けばそれなりの代償が必要なことぐらい、予測できるからだ。

「知りたいですが、代償が必要なんでしょう?」

「いや、今回ばかりは何も求めないよ。ただ僕の興味本位で教えるだけだし。知識は共有したほうが良いしね。もちろん、直接的に教える訳じやないけども」

お得意のヒントでも出すのだろう。

思料を巡らせる。聞くだけなら聞いてもいいだろうか。知りたくなければヒントの段階で留めておけばいいのだ。ならば知つてしまおう。

「わかりました。教えてください」

「ヒントは三つ」

人差し指、中指、薬指の三本を立てながら、轟木は言つ。

「ヒント一つ目は『藤原』という名前』、二つ目は『姿を消す鬼』、三つ目は『血縁』。以上の言葉を調べれば、必ず答えは出る。それじゃあ、君も玲瓈みたいに帰りなよ。僕、わりとそういう感じで割り切つて帰つてもらつたほうが、すつきりするんだよね』

にやり、と轟木は笑つた。

### 翌日の放課後。

僕は一人で図書室にいた。周囲にはまだちらほらとだが人影があり、こういった状況下でパソコンを起動させて調べ物をする、とうのは躊躇われたが、しかし躊躇してもいられない。

未だに古いOSを使用したパソコンを起動させ、ブラウザを立ち上げる。トップページの検索サイトに『藤原、鬼、姿を消す』キーワードを打ち込み、検索をかけた。

三万件を超える検索結果のうち、一番上に出たページを開く。

藤原千方、という人物について説明が成されていた。

太平記という書物に出てきた人物で、四体の鬼を使役していたらしい。どんな攻撃も跳ね返す硬い金鬼、強風で敵城を吹き飛ばす風鬼、洪水を起こして敵を溺れさせる水鬼と来て、四体目の鬼で目が止まつた。

隠行鬼、という鬼。

怨京鬼という別名も持つてゐる。姿を消し、気配を消して敵に奇襲する鬼、だそうだ。

考えれば、藤原先輩の鬼と一致する部分がある。

姿を消せる、ということは元から姿がないか、透明になれるかのどちらかだ。仮にどちらだとしても、普段藤原先輩の殺鬼が姿を消していると考へることができるのではないか。

そして藤原という苗字。

偶然の一致か、必然の結果か、真意はわからないが、どちらにしろ、たまたまにしては、ことが出来すぎでいる気がした。

帰り道の校門前で、藤原先輩と遭遇した。

いや、遭遇したなんて言い方は野生動物みたいで、とても失礼なんだけれども。

「あら、槐君じゃない。どうしたの、こんなところで」

「先輩こそどうしたんですか。学校はしばらく休むつて言つてませんでしたつけ？」

「私は暇つぶし。家にいると退屈でね、槐君との関係についても根掘り葉掘り聞かれるし」

どうも、藤原家の中で僕の立場が危うことになつてゐるらしい。変な勘違いは先輩の為にも解消して欲しいものだ。

「ところで、あの尾田って子はどうなつたの？ 私、聞いていいないんだけど」

「ああ、尾田は結局咲間貴美を受け入れることで、一件落着し

たらしいです。まあ、もう元の関係と同じ状態に戻ることは、無いと思いますが

「そう。なんか、悲しい終わりになってしまった、という感じね」  
言つて、先輩は溜息を吐いた。

「そうだ、櫻君。買い物手伝ってくれない？ ちょっと今日は買い込まないといけないから、男手が欲しいの」

「別に良いですよ。こんな貧弱な僕でよければ」

一人して歩き始める。

人とすれ違ひながら進む先輩の横顔を、ぼつと見た。

藤原玲璃、という名前の彼女。

背後に鬼を宿しているというのに、特に気にした様子も見せない彼女。

おそらく藤原千方と関わりを持つ彼女。

歴史上の人物との関係なんてものは、当然のように曖昧だ。そもそも実在していたのかすらわからない藤原千方が、彼女の先祖なんてことは、可能性としてとても低い。

ただ、彼女の背にいる鬼が、藤原千方の四鬼の一体、隠行鬼に近いということには、何かしらの意味があるのだろう。理由の無い憑きものなど、まず有り得ないのだから。

「ところで櫻君。今度私の家に来てくれない？ もう私一人では説明できないから、あなたから説明して欲しいのだけど

「お聞きしますが、今どんな状態なんですか」

「一晩一緒にいたつていったら、まあ、ことがあつただろう、となつたのよ。家族全員それを信じているみたいで、特におじいちゃんは、全力で殴ると言つていたけども」

「絶対に行きたくななりました。謹んでお断りします」  
会話を挟みながら、僕たちは歩いた。

デパートで買い物をし、何日分かもわからない食料を買って、藤原先輩の家に向かった。

道中、不意に先輩が話し始める。

「それにして、妙よね」

「何ですか」

「私たちの関係よ。事件が終わったというのにこうしてまだ関わっている。本當なら、今回の事件が終わって一件落着。それで終了のはずだったのに」

「どうも、先輩は僕と関わり続けるのが嫌らしい。

もちろん、そんなことは僕が許さないのだが。

「別に、いいんじゃないですか」

僕は言つ。

「せっかく関わったんですけど、しばらくは関わりますよ。僕は先輩に、多少ながら興味がありますしね。当分は一緒に行動しようかとも思つてます」

先輩は呆気にとられたのか、少しばかり呆けた顔をして、すぐに鉄仮面を崩した。

「何がそんなにおかしいのか、先輩は笑いを堪えている。  
「何がそんなにおかしいんですか？」

ついに、先輩は笑つてしまつた。

「だつて……今の言葉つて、ある意味告白みたいじゃない」

「そういうんじゃないですってば」

なんだか恥ずかしくなつて、何度も否定した。

話しながら、僕は考える。

どうして関わってしまいたいと思つたのか、つい最近までは関わたくないと思っていたのに、これでは心変わりが早すぎるだろう。まあ、別に良いか。僕は端的に結論づける。あんな事件があつて、少しだけでも藤原先輩に意識を向けられるよになつた、と思つことにした。

所詮單なる吊り橋効果による興味かもしれない。ただ、それでも僕たちは関わつて、お互いのことを多少だが知り得た。それを発展させたいと思うのは、正しいことだろう。

こうしてお互いに秘密を共有し合う関係がいつまで続くかはわか

らない。僕はまだ藤原先輩にいっていいことがあるし、先輩もまだすべてを見せたわけではないだろう。この曖昧な関係は、いつ壊してもおかしくないのかも知れない。

ただ、それでも。

先輩と僕が関わったことに、瓦解するまで関わることで、変わりは無いだろう。

## 突然変異 《13》 後日談（後書き）

なんとか書ききつました。

これでとりあえずは一時終了になります。完結設定はしていませんので、続きを思いつき次第更新したいと思います。

今本文を読み返したら酷い状態でしたので、近々（ではないかも知れませんが）修正していくうか、と考えております。一人称用の練習に書いていたので、もっと時間をかけて作ってみようかと考えています。

ここまで見て下さった方も、途中まででも見て下さった方も、途中からでも見て下さった方も、ありがとうございました。今後も精進していくので、よろしくお願ひします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3370n/>

---

鬼姫怪奇譚

2011年1月9日20時25分発行